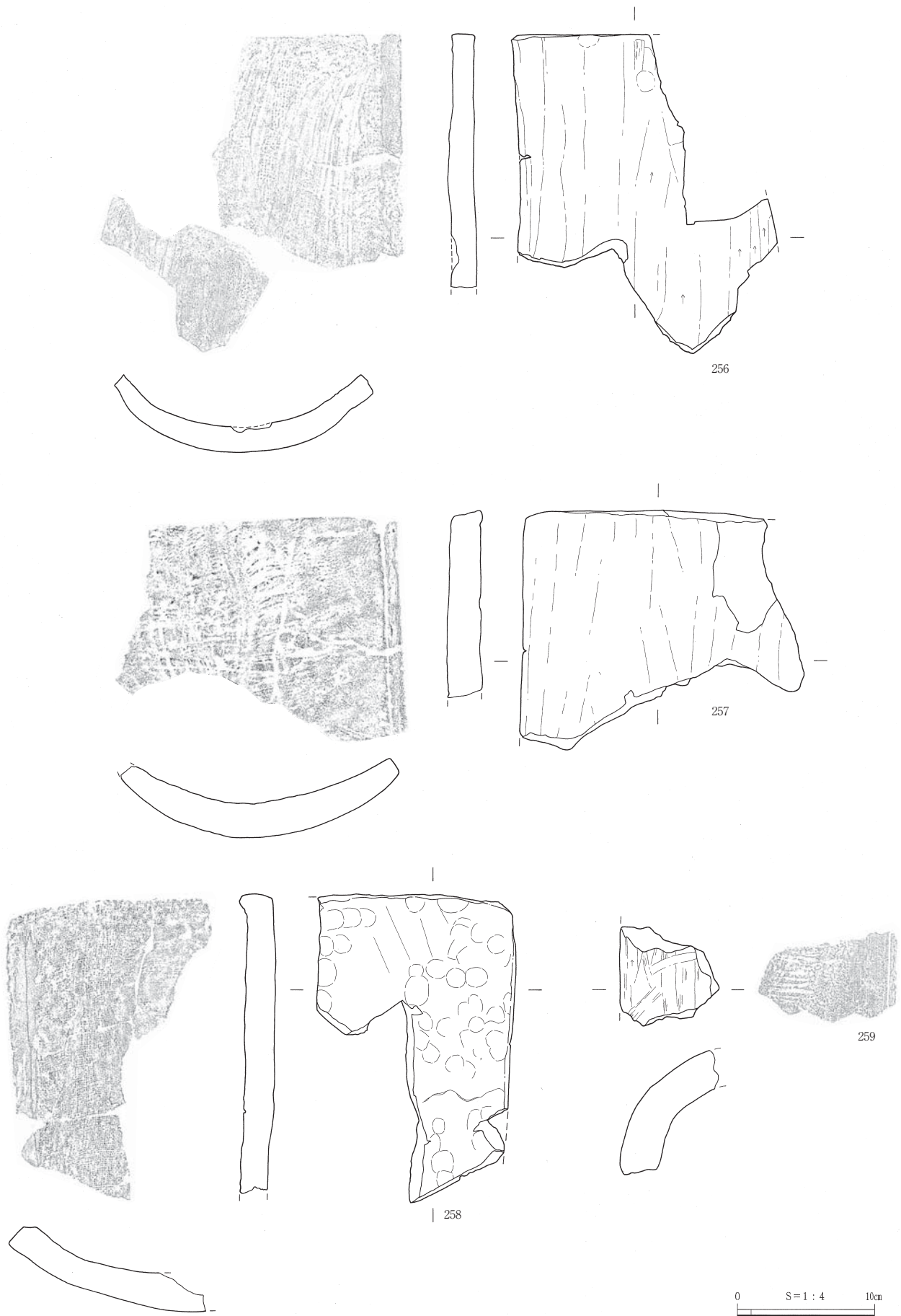
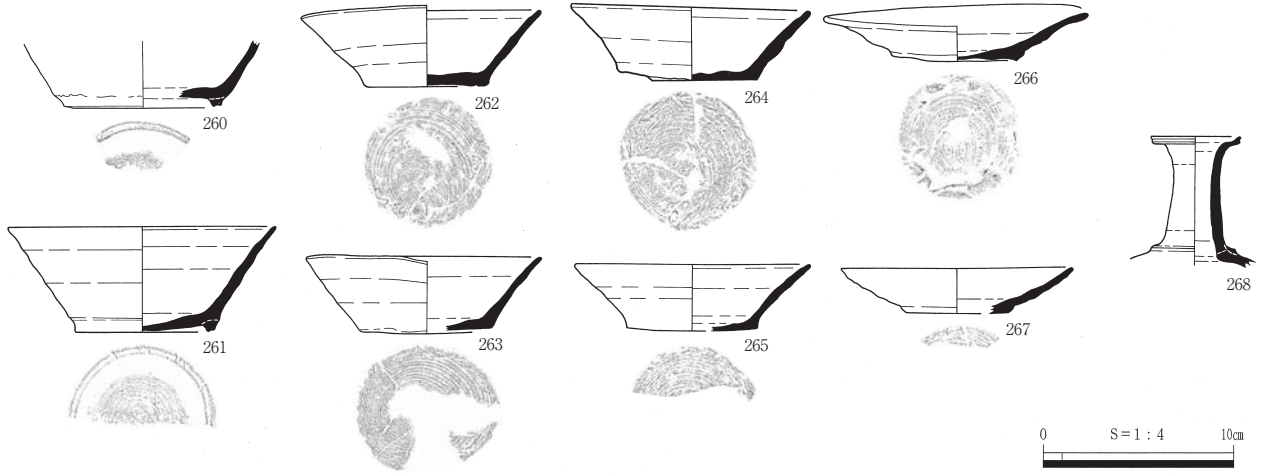


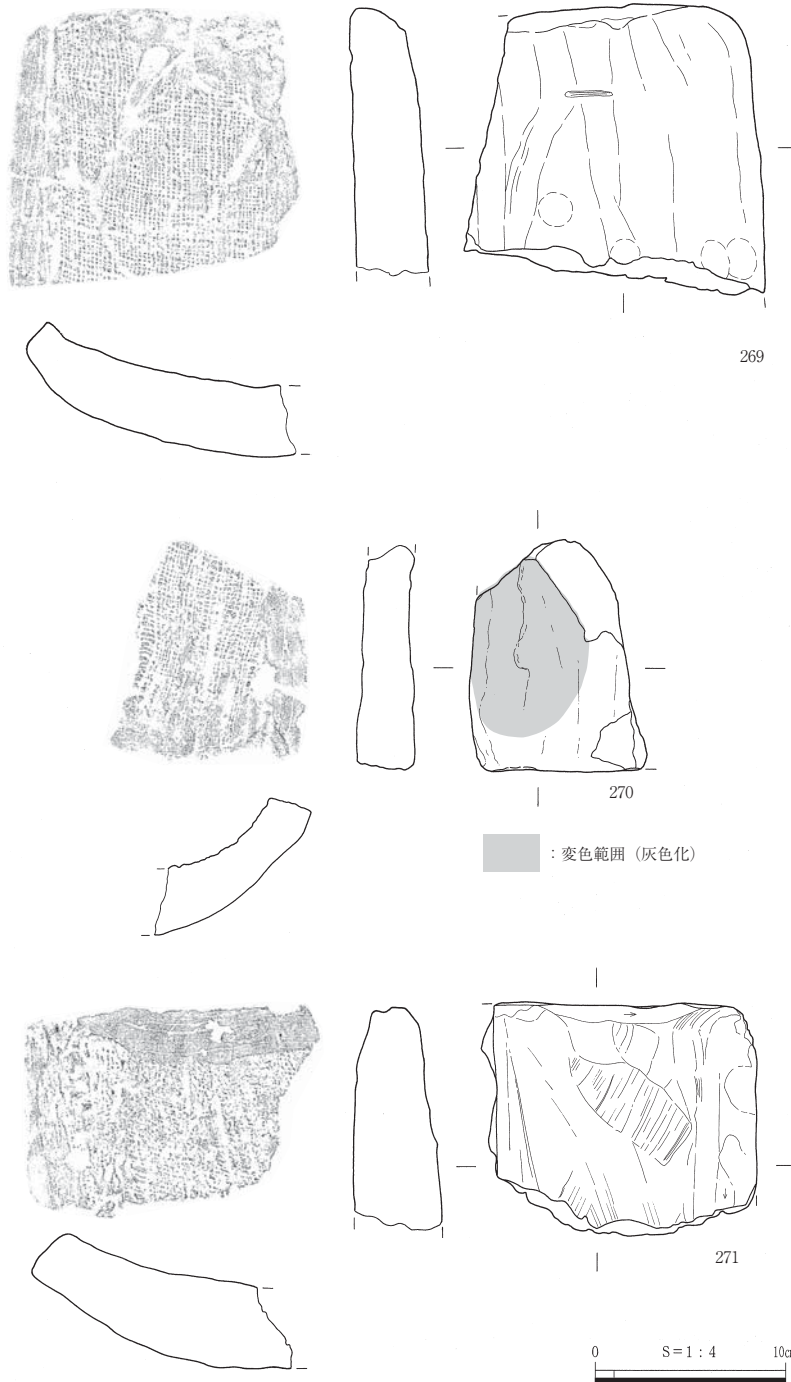
第113図 窯2新段階出土瓦(5)



第114図 窯2新段階出土瓦(6)



第115図 窯2埋戻し土出土須恵器



第116図 窯2出土瓦

6 窯3

(1)位置と概要(表41)

窯3はG9グリッドの丘陵斜面裾部に立地する。窯3の東側には窯2が位置する。窯3の長軸は、窯1・2主軸と方位を違えており、北北西から南南東方向を採っている。

窯のすぐ南側は、斜面中腹からの湧水が流れ込む小さな谷が存在し、この谷は製鉄炉に付属する排滓場(排滓場2)として利用されている。谷の水源である湧水層は、標高54m付近に見られる、溝口凝灰角礫岩層中の弱風化岩質層と強風化ローム質層の層理面にあった。調査中は、雨が降ると谷にしばらく流水があり、谷周辺の地山は常に水を多く含んでいた。窯3周辺の地山も例外ではなく、窯の側面からは水がにじみ、底面にはしばしば水たまりができていた。このように、窯の立地には明らかに適さない状況にあった。ただし、窯の築造・操業時にはこの谷に湧水がなかった可能性も考えられるかもしれない。しかしながら、湧水は丘陵上に降った雨水に由来するものなので、地質条件が変化しない限り、湧水層が変化することも考えにくい。したがって、窯築造当時もかなり水気の多い環境だった可能性が高い。

窯3は、窯1・2と異なり、地下式窖窯である。窯は素掘りで築かれており、地山をそのまま窯内壁面として使用している。天井もおそらく構築部分はないと考えられる。焚口開口部から窯尻掘り込み端までの長さは7.0m、上面最大幅は1.8mを測る。

窯3では重複する3つの床面を認定した。ただし、後述するように、焼成面自体は2面の可能性もある。床面とそれに対応する窯の操業段階を、古い(下層の)ものから順に、第1段階(床面)、第2段階(床面)、第3段階(床面)と呼ぶこととする。なお、壁面には明確な補修痕跡が見られず、天井が補修ないしは改築されたと推測できる窯体片などは出土していない。

窯3からは、須恵器片709点が出土した(表41)。出土数は窯1・2に比べてかなり少ない。焼成面段階別に出土量をみると、第1段階埋土出土が28点、第2段階埋土出土が55点、第3段階埋土出土が474点で、第1・2段階はとくに遺物量が少ない。そのほか、152点の須恵器が窯廃絶後の流入土などから出土している。窯3出土の須恵器片は杯類と甕が主体となり、両者ともに全出土量の約4割を占めている。皿が少なく、甕の組成率がかなり高い点で、窯1・2の状況と異なる。その他は、壺類、鉢がややまとまって出土している。瓦は全く出土していないので、出土遺物の状況だけをみれば、窯3で瓦を焼成した可能性は非常に低い。

(2)土層の堆積状況(第117・118図、PL33)

窯3内部の堆積は、窯1・2と大きく異なっている。堆積層は、第1段階埋土(19~23層)、第2段階貼床層(17・18層)、第2段階埋土(16層)、第3段階窯焼成時生成土層(15層)、天井崩落土または天井崩落後流入土層(1~14層)に分けられる。すべての層から遺物が出土しており、とくに8層と15層に集中して須恵器が含まれていた。

第1段階埋土の19~23層は、炭化物や焼土粒を多く含む土層である。20層は焼土ブロック主体の黄褐色系の土層で、それ以外は炭化物主体の黒色系土層である。これらは、第1段階窯の焼成に伴って生じた炭が、焚口側に掻き出されたものと考えられる。17・18層は第1段階埋土の上に堆積するロームブロック土で、17層は被熱によって固化、赤化している。この2層は、周辺の地山土を第1段階埋土上に盛り付けた貼床と考えられる。これらの層の上面が第2段階床面とみられる。

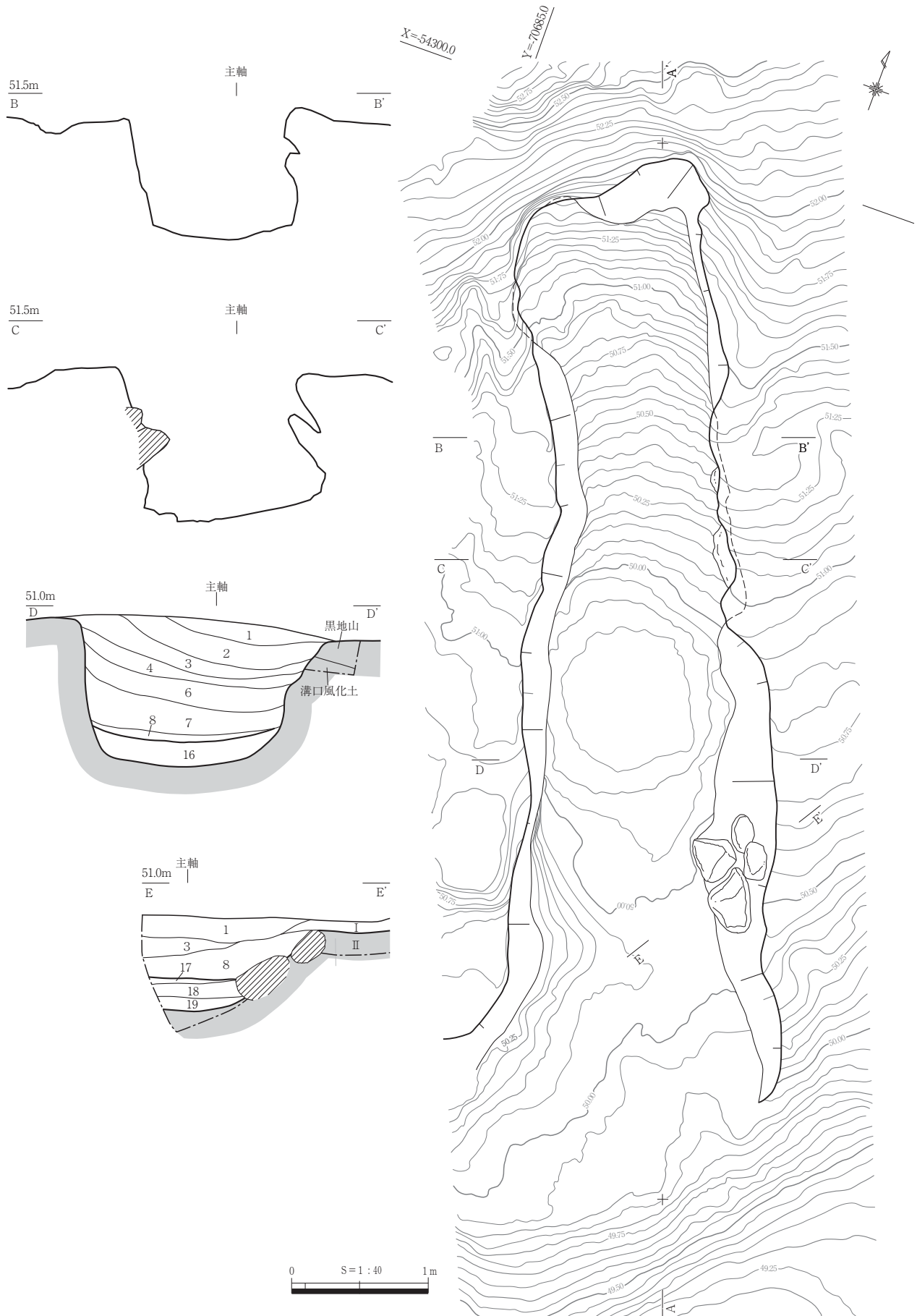
ただし、第1段階埋土とした19～23層に含まれる炭化物は、窯1・2堆積土包含の炭化物に比べて大型で残りも良く、むしろ炭焼窯から出土する炭化材に類似している。この点を重視すれば、これらの土層は窯焼成時の生成土ではなく、意図的に炭や焼土を多く含む土を焼成部付近の床に盛ったとも考えられ、17・18層と一連の貼床であった可能性もある。こうした土層を貼床に加えることで、水気の多い地山土の除湿の効果を狙ったとも考えられる。このように考えた場合、第1段階は、窯としての焼成を行っていない、単なる掘方であったことになる。しかしながら、これらの土層に窯3操業に伴う可能性がある須恵器片が少量ながら含まれることと、堆積層の形状やその堆積順序が焼成時生成土の掻き出しと見た方が自然であることから、第1段階は窯として操業していた可能性が高いと判断した。

16層は黒色の炭化物層で、第2段階窯焼成時の生成土層か、その二次堆積層と考えられる。窯底部の最も標高の低い部分に堆積している。後述するように、16層上面で意図的に敷き詰められた可能性の高い大型の甕片が集中して出土した。またその他にも、この層の直上からは極めて多くの須恵器が出土している。こうした遺物出土状況から、16層上面を第3段階床面として認定した。なお、16層からは50点ほどの須恵器が出土したが、この層の掘り下げ時には窯底部が常に滞水していたため、16層

表41 窯3出土須恵器の器種組成

層位名	地区	器種 (下段数字は分類番号)																	合計			
		高台杯			杯	杯類	杯皿類	皿		長頸壺		壺	瓶類	甕	甕or瓶	焼台	鉢	不明				
		1	2	3	4	6	8	5	7	9	10	11	14	15	16	17	18	18				
第1段階埋土	焚口				1	2													2			5
	燃焼部				1	2					1			3								7
	-			1	5	3					4	2	1									16
第2段階埋土	-			1	3	4	1					1	1					2			13	
第2段階貼床	-			1	3	8	3				1	1								4		21
第3段階床直～第2段階埋土	-			1		4	3				2	1	10									21
第3段階床直	焚口																		1			1
	奥壁付近				2									2	1							5
	-	12	2	18	12	1					1			33								79
第3段階床直 (床内にめり込む)	-				5									200								205
第3段階埋土 (8層)	焚口	1		3	11	27	13	1	1		5	5	2	1								70
	南半			1	1	3	2	1			2	1	8									19
	-			3	7	15	18	1	1		7	3	11						1			67
第3段階埋土				1	1	1				1				1					1		6	
第3段階埋土?	焚口			2	8	5	1	1			2		3									22
一 括	焚口			1	1	15	8				5	3	7	1								41
	燃焼部	1			1	3	4				1		2									12
上 層	-		2	3	6	11	27				7		1							10		67
表土～検出面	-	1			5	8	3	1	3	1	2	2	2								1	29
不 明	-												3									3
合計		3	14	19	79	123	85	5	1	4	1	41	21	291	3	3	15	1				709

窯段階	器種 (下段数字は分類番号)																	合計			
	高台杯			杯	杯類	杯皿類	皿		長頸壺		壺	瓶類	甕	甕or瓶	焼台	鉢	不明				
	1	2	3	4	6	8	5	7	9	10	11	14	15	16	17	18	18				
第1段階埋土合計	0	0	1	7	7	0	0	0	0	0	5	2	6	0	0	0	0	0	0	0	28
第2段階埋土合計	0	0	3	6	16	7	0	0	0	0	3	3	11	0	2	4	0	0	0	0	55
第3段階埋土合計	1	12	11	53	63	36	4	1	1	0	18	11	259	2	1	1	0	0	0	0	474



第117図 窠3完掘平面図・短軸土層断面図

と15層の区別が困難であった。そのため、これらの層の層理面付近の出土遺物については、やむを得ず機械的に出土標高差から帰属層を判別したので、それらの帰属はやや確実性を欠いている。

15層は焼土ブロックを含む黒褐色の粘土からシルト層で、第3段階窯の焼成時生成層や窯床面・壁面土などを母材とする水成堆積層と考えられる。窯の北西半分のみに薄く堆積している。この層の下部(第3段階床面直上)から多数の須恵器が出土した。

1～14層は天井崩落土層や天井崩落後の流入土層で、いずれも窯廃絶後の堆積層と判断した。このうち8層のみが炭化物を多く含む黒褐色土、その他は褐色系の土層である。9～14層が、窯天井部分と考えられる地山のブロックを多く含む、天井崩落土とその二次堆積層である。このうち最も新しい堆積と判断した9層はとくに大型の地山ブロックを含む層で、大部分の天井が落盤した後、それらが母材となって形成された二次堆積層と考える。また、土層断面図に示したように、9層に含まれる大型地山ブロックのなかには、還元焼成部分と酸化焼成部分が観察できるものも含まれていた。8層はその北西端が9層上に堆積することから、天井崩落後の堆積層と考えられる。しかし、その層相を見る限り、窯焼成時生成物が母材となっている可能性が高い。おそらく、天井崩落前に焚口側に掻き出されていた焼成時生成物が、天井崩落後に二次堆積したものであろう。この層からは大量の遺物が出土している。1～7層は天井崩落後の流入土と考えられる。このうち、3層は焼土ブロックと炭化物を多く含む層で、窯跡の窪地の埋め戻しなどの行為によって、人為的に形成された層の可能性もある。その他は、自然堆積の可能性が高く、水成堆積の粘土からシルト層もみられる。これらの層からも遺物が一定量出土している。

窯3の地山基盤層は、窯1・2と同じく溝口凝灰角礫岩層の風化層(XII層)である。ただし、窯1・2の地山よりもかなり硬質で、角礫を多く含んでいた。この地山が床面となる焼成部床面では、大半が赤色化ないしは黒色化していた。ただし、滞水や流水による二次的な鉄分の沈着が著しく、色調の変化が焼成によるものかどうかは不明確であった。しかし、第2段階床面に相当する貼床層は確実に焼成によって赤色化しているので、その他の床面も本来は焼成による変色があった可能性は高い。一方、焚口付近や窯尻付近以外の壁面の地山土は、還元焼成によって固化するとともに、灰色や黄色に変色していた。

(3) 窯の構造(第117・118図、PL34・36)

窯3は地下掘り抜き式窖窯である。窯の平面形は歪で細長い長方形を呈し、両側壁は概ね平行している。掘方の規模は窯1・2に比べて大きく、掘方上面で長さ7.0m、最大幅1.8m、底面で長さ6.6m、最大幅1.4mを測り、遺構検出面から底面まで最大約1.3mの深さがあった。

窯の横断面形は、各段階を通じて全般に底面が比較的水平で、側壁の立ち上がりが急角度となっている。側壁の残存状況の良い焼成部で横断面形を見ると、本来の窯横断面形は底面に最大幅があるアーチ形または三角形であった可能性が高い。

一方、窯の縦断面形は焼成面の段階毎に形状を変化させている。それに伴って、窯の機能部位にもいくつかの変化があったとみられる。

第1段階窯(掘方)の底面縦断面形は、開口部から約3mは奥壁側に向かってほぼ水平で、そこから奥に向かって下り傾斜となり、開口部から約4m奥に入った地点から急な上り傾斜となる。開口部付近で底面が水平な部分の南半を焚口、その北半から下り傾斜部分までを燃焼部、それ以北を焼成部と

捉えた。焼成部での床面傾斜角度は25°～40°である。

第2段階では、床面を形成し直している第1段階焚口、燃焼部に相当する部分で、床面が30cmほど高くなっている。この床面のかさ上げによって、奥壁に向かう下り傾斜の範囲が広がるとともに、その角度が急になっている。貼床に用いられた17層が酸化焼成していることから、貼床層を中心とする下り傾斜部分が燃焼部であった可能性が高い。したがって、窯の機能部位は第1段階とほとんど変化がなかったと考えている。なお、床面がかさ上げされた範囲以外では、第2段階床面は第1段階床面と共通している。

第3段階では、第2段階床面の燃焼部から焼成部の傾斜立ち上がり付近にかけて、床面が約15cm高くなっている。この床面のかさ上げによって、第2段階床面燃焼部の下り傾斜の範囲が広がるとともに、その角度が緩やかになっている。また、下りから上りへの傾斜変換点が奥壁側に移動している。この傾斜変換を燃焼部と焼成部の境と捉えると、燃焼部が広がる一方で、焼成部が狭まったことになる。このように、第3段階では、第1・2段階と窯の機能部位にいくらかの変化があったことになり、基本的に窯の規模が縮小していると考えることができよう。

このように、床面は段階を追って変化しているが、側壁には修築の痕跡を確認できなかった。堆積土からは、窯1・2で見られたようなスサ入り焼粘土は出土していない。窯体片として取り上げた焼粘土は、すべて地山が焼成固化したものであった。こうしたことからみて、天井が修築された可能性も低いと考えられる。ただし、側壁や天井の一部が、混和材を使わない地山の粘土を用いて、部分的に補修された可能性はあろう。しかしながら、その明瞭な痕跡は調査では確認できなかった。

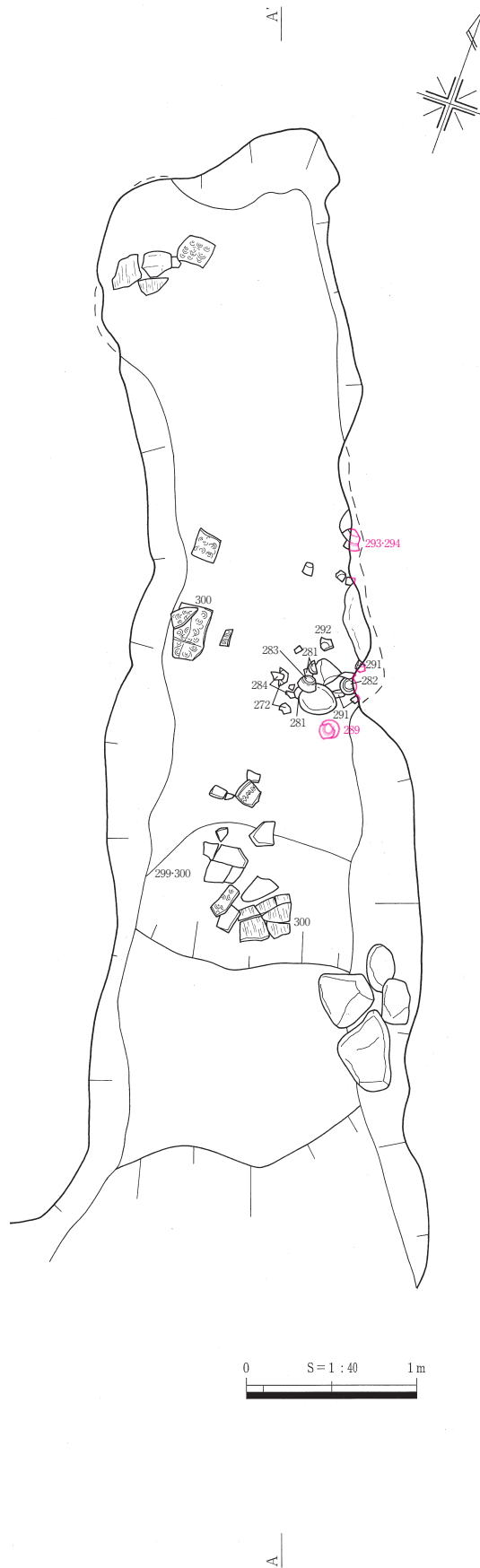
(4) 遺物の出土状況(第119・120図、PL35)

第1段階、第2段階に帰属させた遺物は、主として各段階操業後の堆積層や貼床などから出土しており、窯詰めや窯出し時に遺物が掻き出された状態は留めていない。また、先述のように、その出土量も第3段階や他の窯に比べて非常に少ない。

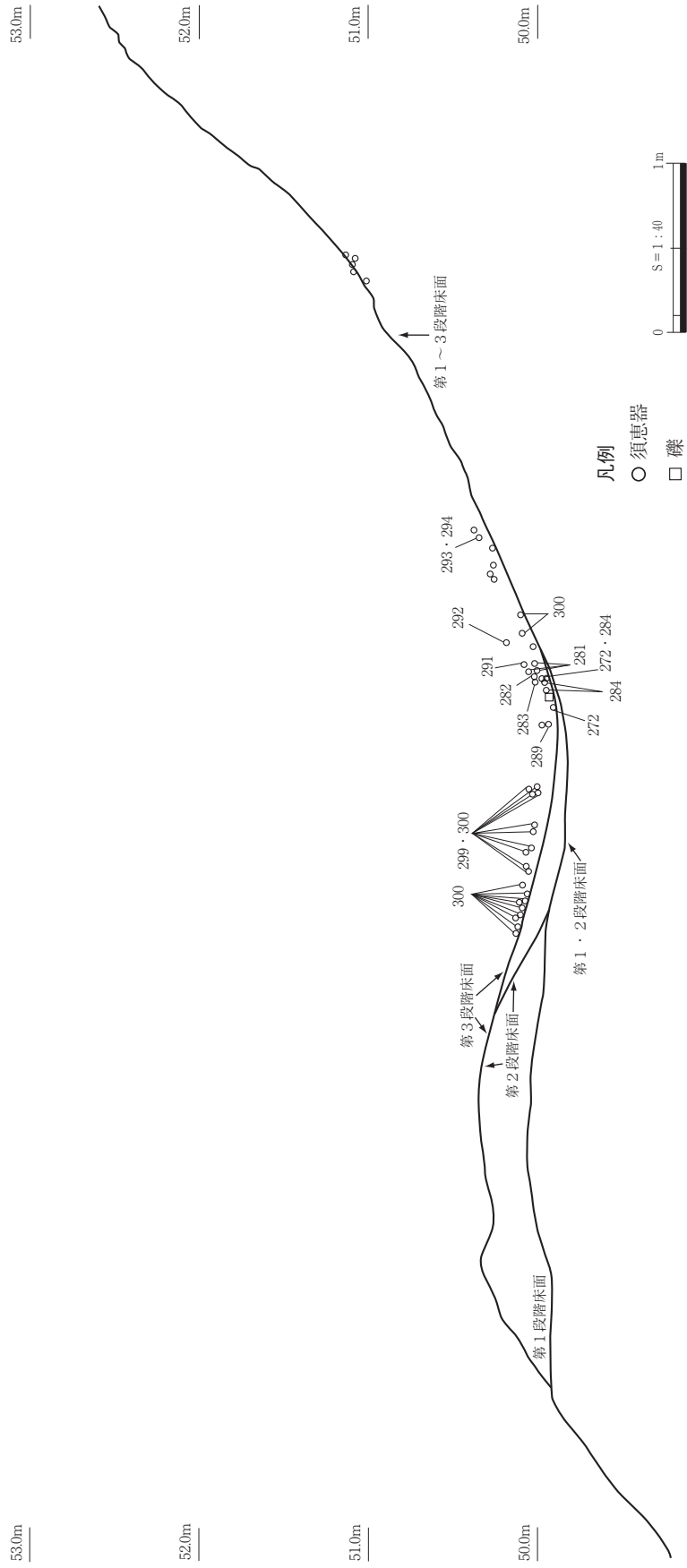
床面直上で遺物が出土したのは、第3段階に限られる。したがって、ここでは第3段階の遺物出土状況を示しておく。

第3段階床面直上からは、甕片と杯類が多く出土した。このうち甕片は、燃焼部付近で大型の破片が床に敷き並べられたような状態で多数出土したほか、焼成部や窯尻付近でも破片が床に密着したり、めり込んだりした状態で出土した。このうち、窯尻の破片は、その出土位置から見て、焼成品の残置や掻き出しによるものとは考えられない。また、ほぼすべての破片が床面に密着していたことも併せて考えると、第3段階床面の形成や補修の一環として、意図的に甕片を床面に敷き詰めたと推測できる。これらの甕片の多くは接合し、甕口縁部299と甕胴部下半部300となった。両者は同一個体と考えられるほか、接合しなかった破片もこれらと同一個体の可能性が高い。この甕は焼成が非常に甘く、なかには粘土化した破片も含まれており、完全な焼成不良品であった。こうしたことから、焼成後、窯出しをせずに、そのまま床面補修用の材料として転用した可能性があろう。

杯類は焼成部東壁際の傾斜変換点付近から集中して出土した。これらは規則的な配置をとっておらず、大半が破片であることや、須恵器に混じって礫も出土していることなどから、最終操業時の掻き出しによって形成されたと考えられる。ただし、289は伏せられた状態で床面に接して出土しており、その上には同様に逆位の杯が重なって出土した。焼成部東壁際の遺物集中部から出土した杯類はすべ



第119図 窯3第3段階遺物出土状況図(平面分布)



第120図 窯3第3段階遺物出土状況図(垂直分布)

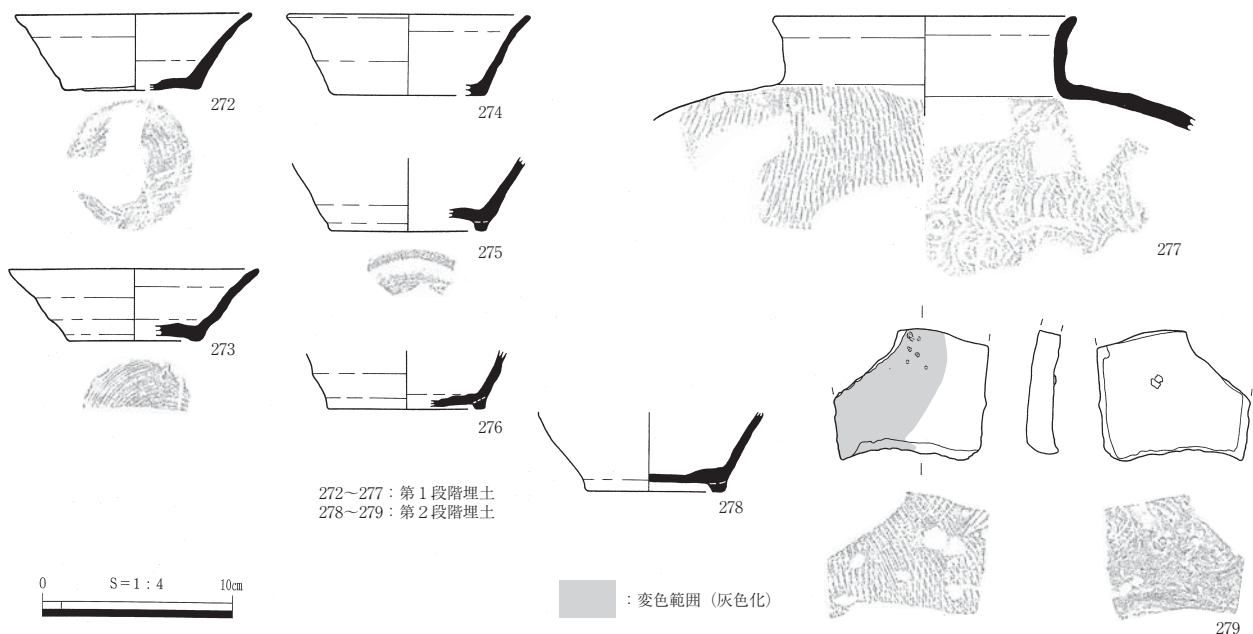
て酸化焼成に近い焼成状態を呈するなかにあつて、289のみは完全な還元焼成となっているため、二次焼成を受けた可能性が高い。したがって、289は焼台として用いられていた可能性がある。焼台と杯が重なって出土していることから、それが原位置を留めているかどうかは不明ながら、窯詰めの状態や窯詰め方法のある程度反映している可能性がある。

(5) 出土遺物(第121~124図、PL85~89)

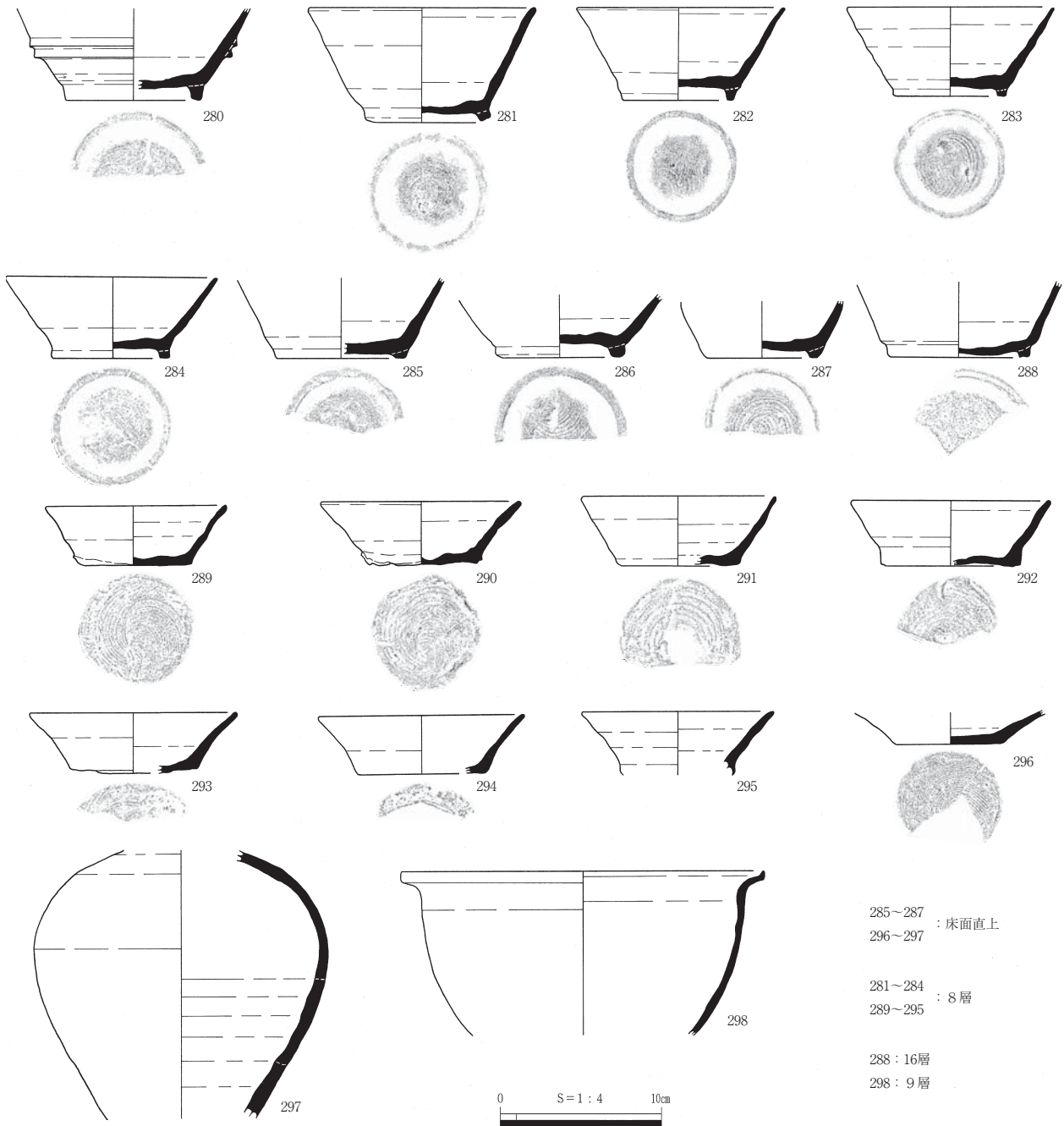
第1段階は出土遺物が極めて少なく、杯類15点、壺5点、瓶類2点、甕6点の計28点である。このうち272~277を図示した。272~274は杯、275・276は高台杯、277は横瓶と考えられる。全形の分かる個体が複数存在する杯は、形態差が大きく、底径の大きさや、体部の開き具合に差が見られる。

第2段階も、出土遺物は須恵器片55点と非常に少ない。杯類のほか、甕、壺、瓶類、鉢、甕転用焼台が出土している。278は高台杯で、体部に若干の焼き歪みが生じている。279は甕片の転用焼台である。二次焼成によって還元して表面が発泡しているほか、積み痕の可能性のある変色範囲と粘土片の熔着が見られる。

第3段階の出土遺物は須恵器片474点と、まとまった量が見られる。杯類と甕を主体とし、皿、壺、瓶類などが少量構成される。破片数では甕が最も多いが、その大半は床面直上出土の同一個体片である。個体数では杯類が主体となる。なお、窯3第3段階では、窯1・2と比較して、杯類に占める高台杯の割合が高い。280~288が高台杯で、281~284が床面直上出土、288は床面直上または16層に包含されていた可能性のあるもの、そのほかは8層出土である。形態的な特徴は、窯1・2の高台杯に比して、口径と底径の差が小さく体部が立ち気味になるほか、器高がやや低い傾向にある。289~295は杯で、すべて床面直上出土である。杯も高台杯と同様に底径が大きめで、体部が立ち気味になる個体が多いように思われるが、底径が小さく体部が開く個体もあるため、全体的な傾向は不明である。なお、289は二次焼成によって完全に還元化しているのに、第3段階最終操業以前に焼成された可能性がある。296は皿で、8層からの出土である。297は8層出土の長頸壺の胴部で、口縁から頸部を



第121図 窯3第1・2段階出土須恵器

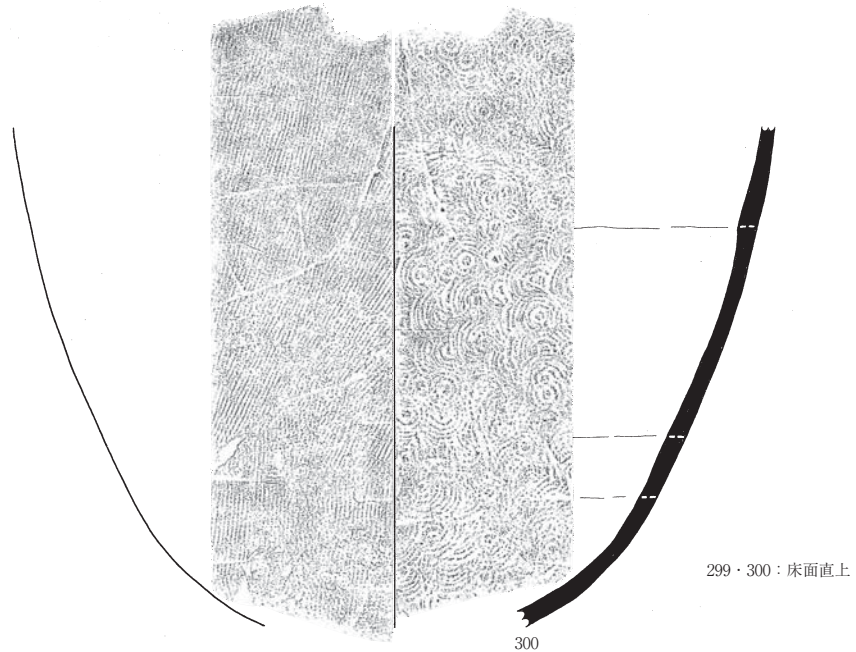
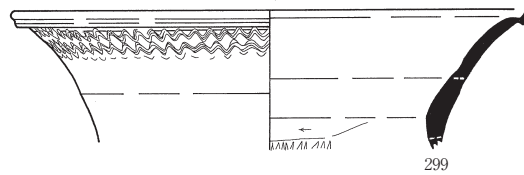


第122図 窯3第3段階出土須恵器(1)

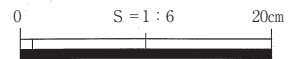
欠くため全形が不明だが、水瓶の可能性があろう。298は比較的残りの良い鉢で、9層出土である。299・300は床面直上に破片が並べられていた甕である。

そのほか、1～7層の流入土からも須恵器などが出土している。301～304は高台杯、305～308は杯、309は皿、310は甕である。皿は極めて少量しか出土しておらず、窯3での生産に伴うかどうか不明である。

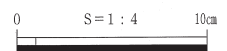
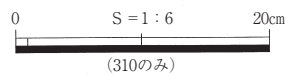
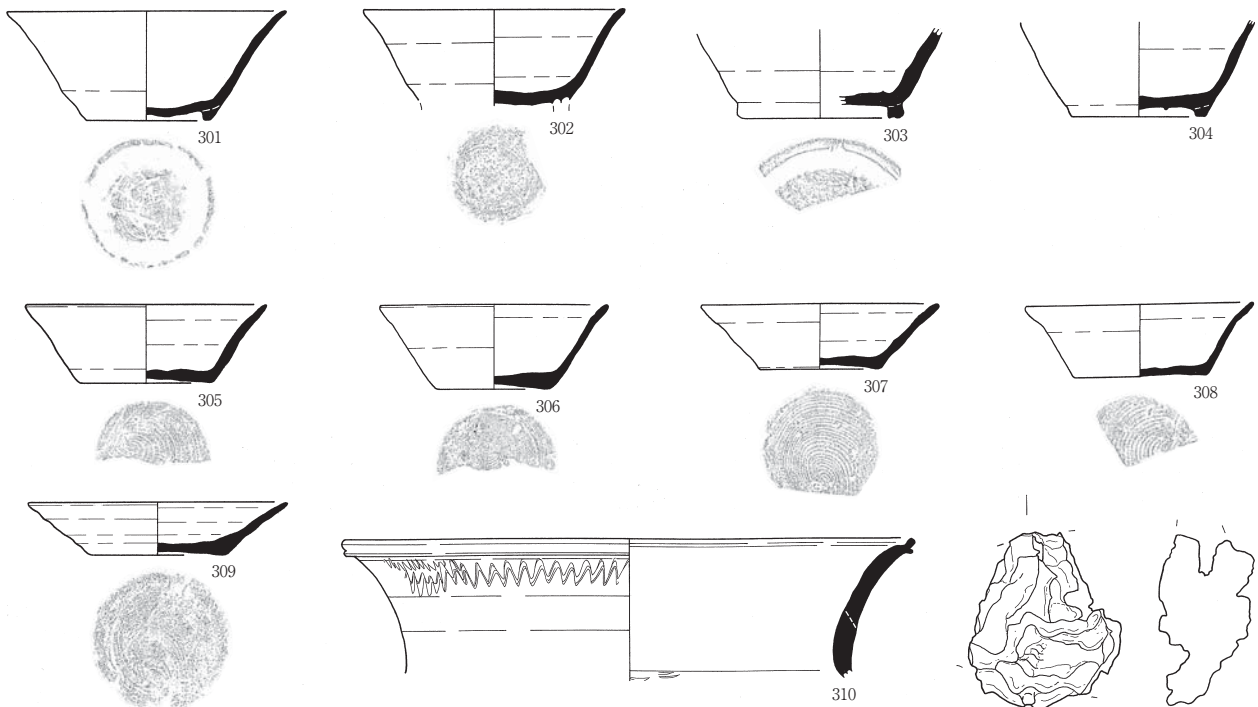
④は窯上部の表土から出土した流出溝滓で、窯3ではその他に炉底塊が1点出土している。いずれも製鉄炉や排滓場2からの流れ込みであろう。



299・300：床面直上



第123図 窯3第3段階出土須恵器(2)



第124図 窯3流入土出土須恵器・製鉄関連遺物

7 灰原

(1)位置と概要(第125図、PL37・38)

灰原は窯1～3の東側の斜面裾部から谷底の平坦部にかけて、F7・8、G7・8、H7・8グリッド内に広がっている。灰原の範囲は窯と接しておらず、両者間の土層堆積の連続性は確認できていない。灰原は3箇所のみとまとまりとして把握できたため、灰原1～3の3つの遺構名を付した。ただし、先述のように、これらの灰原は道1・2によって切られているほか、東側や南側を中心に棚田造成による削平を受けており、残存状態が悪い。特に、地形改変以前は灰原1と灰原3は本来一体であった可能性が高く、また、灰原2は灰原の二次堆積上のみで形成されているので、3つの灰原はいずれもプライマリーな灰原の単位を示すものではない。

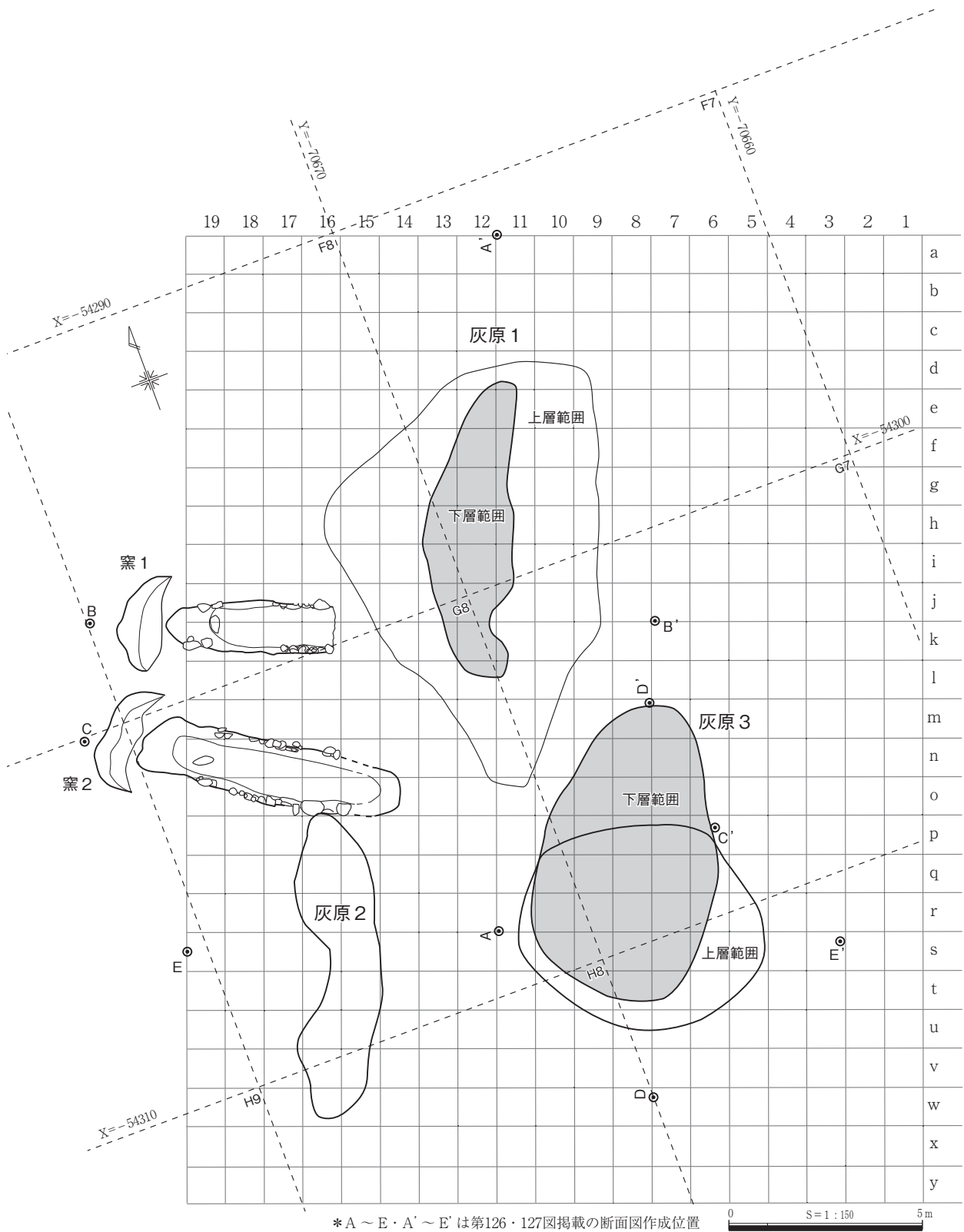
これらの灰原1～3は、あくまで調査上の便宜的な遺構単位ではあるものの、こうした平面的なまとまりが3つの窯跡との対応をいくらかは示す可能性があるとの予測をもって設定した。平面的な位置関係からすると、灰原1の大半は窯1と関連が深いように見える。灰原3は窯から大きく離れているので判断しづらいが、南寄りに広がることから窯2または窯3に由来するものが中心となる可能性がありそうである。

灰原は、炭化材や炭粒を非常に多く含む、黒色から黒褐色の堆積土の広がりとして認識できた。須恵器と瓦も非常に多く含んでいるが、あくまで堆積土に遺物が包含されており、いわゆる「モノ原」のように遺物のみが密集して出土しているわけではない。灰原としては比較的遺物量が少ない部類に入ると考えられる。これらの遺物は、先述のように、1mグリッドを設定して人工層位毎に取り上げている。

(2)土層の堆積状況(第126・127図、PL39・40)

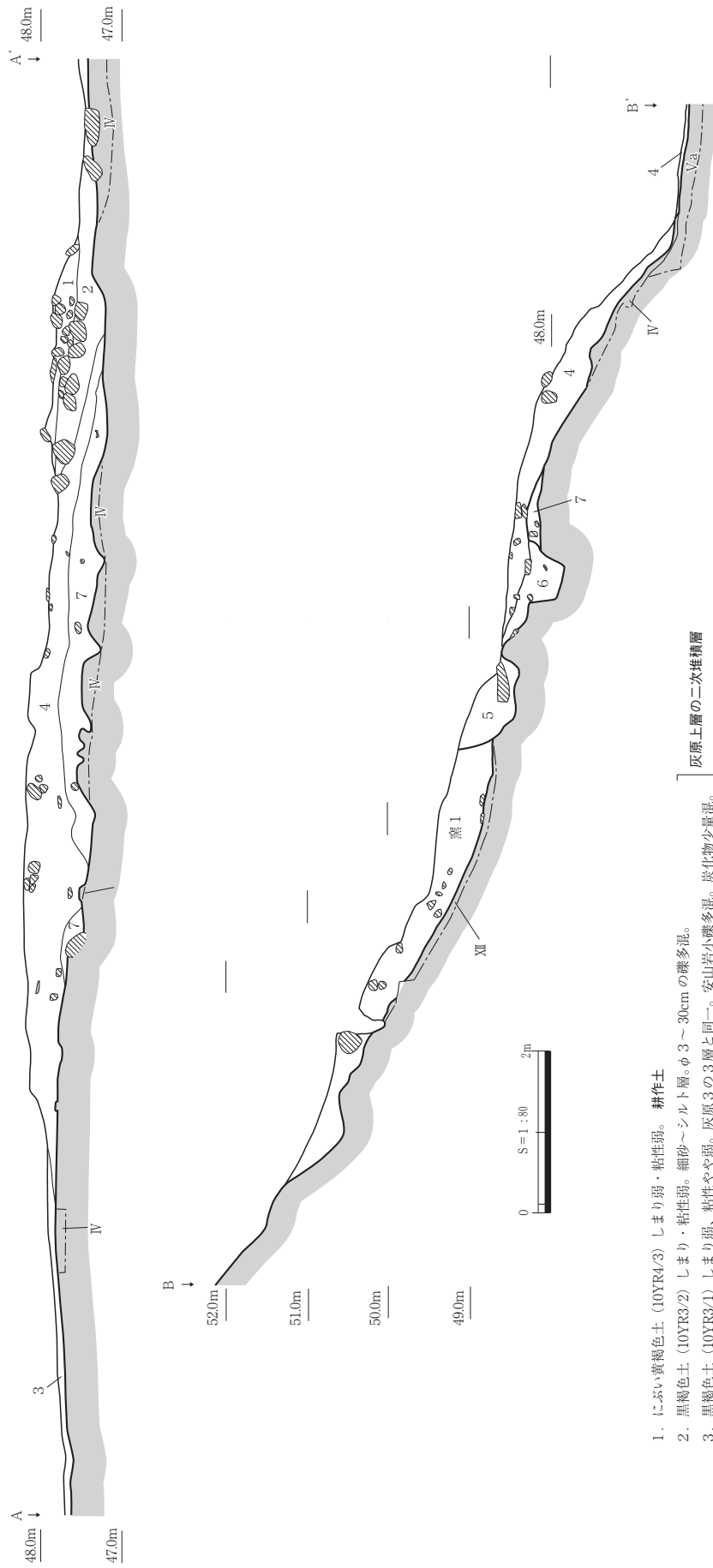
灰原堆積層は上下2層に分離できた。灰原1・3の下部に堆積する土層(第126・127図7層)は、炭化物や焼土ブロックを非常に多く含む黒色土で、これがプライマリーな灰原の堆積物と判断した。以下、この層を灰原下層と呼ぶこととする。灰原下層のなかにも本来、堆積単位が存在する可能性が高いが、同質の土壌の累積によって形成されているため、調査では細かな堆積単位は確認できなかった。なお、遺物の出土状況や接合状況からみて、灰原下層の形成には、窯からの土壌や遺物、炭化物の掻き出しと、人為及び自然的営力による二次的な運搬が複雑に組み合わさっていると考えられる。

灰原1・3の上部と灰原2に堆積する土層(第126図4層・第127図5層)は、炭化物を多く含む黒褐色土で、灰原1・3では下層の上に堆積して、灰原2では単独で堆積している。この層を灰原上層と呼ぶこととする。灰原上層は、灰原下層を切る道2を被覆している。したがって、灰原下層が形成された後、道2が築かれ(おそらく同時に道1も)、さらにその後に灰原上層が堆積したことが分かる。また、灰原付近の道1・2埋土は灰原上層とほぼ同じ土壌が堆積しているため、灰原上層の堆積と道1・2の埋没は同時進行したと考えられる。こうした堆積状況から、灰原上層はプライマリーな灰原堆積物が窯の操業終了後に二次堆積したものと判断した。したがって、灰原上層は厳密には灰原そのものではない。しかしながら、灰原1・3上層は下層の堆積範囲と平面的に重なっており、本来の灰原分布範囲を反映している可能性が高いこと、また、上層にも極めて大量の須恵器が含まれており、それらは灰原出土資料として扱うべきであることから、灰原上層についても灰原の一部として取り扱うこととした。



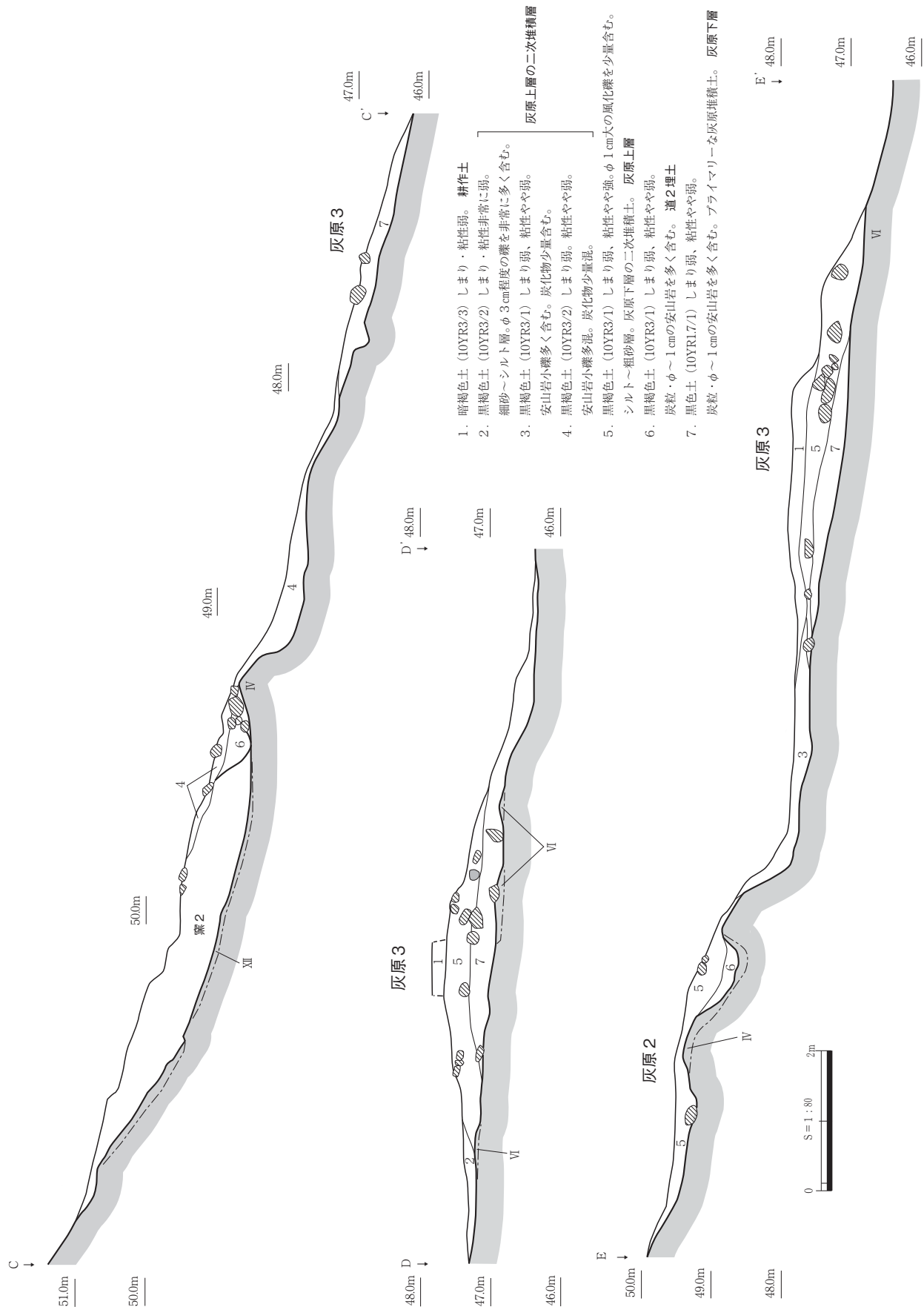
* A ~ E · A' ~ E' は第126・127図掲載の断面図作成位置

第125図 灰原1～3配置図



1. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり弱・粘性弱。耕作土
2. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり・粘性弱。細砂〜シルト層。φ 3〜30cm の礫多混。
3. 黒褐色土 (10YR3/1) しまり弱、粘性やや弱。灰原3の3層と同一。安山岩小礫多混。炭化物少量混。
4. 黒褐色土 (10YR3/1) しまり弱。粘性弱。炭粒・焼土ブロック・φ 5mm以下の安山岩小礫多く含む。灰原堆積土の二次堆積層。灰原上層
5. 黒色土 (10YR2/1) ~暗褐色土 (10YR3/3) しまり・粘性弱。炭粒・焼土粒多く含む。細分は礫1主軸土層断面図参照。道1埋土
6. 黒褐色土 (10YR3/2) しまり弱。粘性弱。安山岩小礫多く含む。道2埋土
7. 黒色土 (10YR1/1) しまり弱。粘性弱。炭粒・φ 2cm以下の焼土ブロック・φ 5mm以下の安山岩小礫多混。ブライマリーな灰原堆積土。灰原下層

第126図 灰原1土層断面図



第127図 灰原2・3土層断面図

また、灰原上層がさらに二次堆積した土層が灰原の周辺に広がっており、これらの堆積層からも比較的多くの須恵器や瓦が出土している(第126図2・3層・第127図2～4層)。これらの層は耕作土直下で検出しており、堆積の時期がかなり下る可能性があるが、古代以降の遺物は含まれていなかった。

(3) 遺物の出土状況(第128～132図、表42～46)

灰原からは破片数にして2万点近い須恵器と瓦が出土している(表42～46)。遺構毎の内訳は、灰原1が12621点、灰原2が1,181点、灰原3が5,605点で、灰原1が全体の半数以上を占める。灰原1は上層の堆積が厚く、その範囲も広いと、上層出土遺物が圧倒的に多い。一方、灰原3は上層と下層ともほぼ同量の遺物が出土している。

灰原には遺物が大量に含まれていたが、先述のように灰原としては遺物包含密度がそれほど高くない。また、灰原上層・下層とも、須恵器や瓦の完形品の出土はなく、全形の半分以上が残るような大型破片も多くない。さらに、同一層準の同一小グリッド内での破片の接合もさほど多くなく、全般に小片化した破片が分散して包含されている印象である。

灰原での遺物の出土傾向を調べるため、器種毎に出土点数を小グリッド別に集計した。併せて、全器種の総出土量と代表的な器種の出土量を示した分布図模式図を作成した。

遺物全体の分布状況(第128図)

遺物総数の分布をみると、先述のように灰原1にかなりの点数が集中していることが分かる。また、各灰原のなかでも遺物分布に粗密が見られる。

上層出土遺物の分布では、灰原1の中央北寄り(e10～g10・e11～g11グリッド)に最も遺物が密集しているほか、中央南寄り(j11～l11グリッド)にもこれに次ぐ量の集中域が見られる。灰原2は中央付近でややまとまった量の遺物が出土しているが、分布は散漫な印象である。灰原3上層では灰原1のような密集域は形成されないが、まとまった量の遺物がr8・9グリッド付近を中心として分布している。

一方、下層出土遺物の分布をみると、灰原1では北寄りのf12・g12付近に密集域が存在し、灰原3では南寄りのr8周辺に密集域が存在する。なお、灰原下層の堆積の厚みは外縁部以外ほとんど一様で、グリッド毎の遺物量の多寡は堆積土量に結びついているわけではない。このように、プライマリーな堆積層である下層にも遺物分布に粗密があり、灰原1・3ともに1箇所密集域が見られる。灰原1と灰原3は本来一体であった可能性が高いとしたが、こうした状況は灰原の形成過程で、遺物の廃棄行為にまとまりがあったことを予想させる。これが窯と結びつくかどうかは別にしても、灰原1と灰原3は遺物廃棄の単位としてある程度まとまりをもっていた可能性が高い。

また、下層遺物と上層遺物の分布傾向を比較すると、上層遺物の分布が下層のそれを概ね反映していることが分かる。したがって、先述のように、上層遺物も平面的には須恵器窯群廃絶時の状態をある程度は残していると見てよいだろう。

杯皿類の分布状況(第129図)

生産の主体となっている杯皿類のなかでも、出土量の多い杯類の方が分布の傾向をつかみやすいため、杯類の分布模式図を示した。なお、図示していない皿類も、上層、下層出土とも、杯類と同様の分布傾向にある。

杯類は出土遺物の主体を占めるため、当然ながら全遺物の分布と同じ傾向を示している。上層での

表42 灰原1出土須恵器・瓦の器種組成(1)

層位名	グリップド			高台杯		杯	杯類	杯皿類	皿		高台皿	蓋	長頸蓋	蓋(11)		器種 (下段数字は分類番号)	瓶類	甕	甕or瓶	焼台	鉢	鉢鉢	鏡	不明	平瓦	丸瓦	道瓦	合計
	1	2	3	4	5				7	8				9	10													
d9	1	1	1	4	7	16	1	1	1	1	2	1	1	2	4	瓶類	14	4	1	1								37
d10	1	4	22	21	89	3	1							4		1	5								3	1	155	
d11		3	24	27	56	1	4							7			17				1				9	1	150	
d12	1	2	13	17	55	1								19			38				1				5	1	153	
d13			2		3									2			4										11	
e10	1	6	62	64	142	6	2							11			19				2				5		322	
e11	5	14	96	116	306	8	10							11			3				1				15	1	622	
e11~h11	3	9	64	150	262	2	11	1						14			23				3	1			1		546	
e12		7	17	28	36	2	2							2			13								1	1	109	
e13		2	5	2	6									4			3								1	1	24	
f9	2	8	15	40		1								1			4								1	1	72	
f10	2	2	44	76	192	11	7							12			2								2		364	
f11	1	10	38	93	189	4	6							4			7								2		355	
f12		9	19	60										2			4								5		99	
f13		2	24	28	86	3								9			7								1	1	162	
f14		1	6	22	11		1							1													42	
g9		2	4	8	24									3	1		3										45	
g10		6	48	74	227	4	6							5			1				1						383	
g11		6	43	62	275	5	16							11			24								10		453	
g12		5	25	51	91	2	1							4			10				2						191	
g13		1	14	18	59	3								6			5								3	6	115	
g14	1	7	25	46	53	5	3	1						7			2				3	1					159	
h8						2																					4	
h9		4	6	7	28									3											1		53	
h10	2	5	20	49	88	2	1							5			1				1				1		184	
h11		3	26	33	82	10	4							4			1								1		184	
h12					5	2																			2		9	
h13		1	9	12	28	1								1			3										55	
h14		2	27	20	53	1	1							2			20								3		130	
i9		1	3	3	23	1								2			1										34	
i10		2	11	22	45	2	8							4			9				6	1			5		115	
i11		4	19	18	70	1	7							5			1				3				9		147	
i12		2	3	9	29									1			7								4		55	
i13	1	1	10	6	28	2	1							1			6								1	1	59	
i14		2	12	19	34									1			10								4	1	82	
j9		1	4	5	11												1								1		23	
j10	1	2	15	13	65		3							2			14				1				3	2	117	
j11		8	39	56	157	13	8							15			2				1				3		330	
j12		6	17	20	69	1	3							5			12				1				1		135	
j13	1	2	15	21	96	3	2	1						3			1								3		162	
j14		4	33	33	131	3	6							6			8								3		227	
k9	1		1	7	8	2								1			3								1		24	
k10		3	30	18	43	3	2							5			7				4				4		119	
k11	1	1	9	58	77	185	10	17						18			3				2				5	1	411	
k11~m11			1	2	10												1										14	
k12		1	14	8	38									4			12				4						81	
k13	2	2	9	10	34									1			2										61	
k14		5	20	26	80	3	1							4			3				1	1			2		146	
l10		4	5	6	17	1	2							3			1										44	
l11	4	2	13	69	107	175	8	20						25			5				4						459	
l12		1	18	23	81	3	3							8	1		1				1	1					158	

上層

表43 灰原1出土須恵器・瓦の器種組成(2)

層位名	グリット		高台杯		杯	杯類	杯血類	皿	高台皿	蓋	長頸蓋	蓋(11)	高台底	系切底	水甕	短頸蓋	小蓋	その他	平瓶	瓶類	甕	甕or瓶	焼台	鉢	鉢鉢	碗	不明	平瓦	丸瓦	道具瓦	合計	
	1	2	3	4	6	8	5	7	18	18	9	10	高台底	系切底	11	18	18	18	18	18	15	16	17	18	18	18	18	18	18	18	18	
上層	h13	1	9	9	34	3	7					2								2	13	1	1								82	
	h14	2	6	11	19						1										5											44
	m10	1	6	17	24	54	2	4			8						1			6	11		2				4				11	
	m11	1	6	17	24	54	2	4			8									6	11		2								140	
	m12	1	6	17	24	54	2	4			8									6	11		2								46	
	m13	4	14	9	59	2	2				10									1	9										110	
	n10	1	1	1																2											2	
	n11	2	3	11																2	2		1								21	
	n12	1	2	5							3									1			1								15	
	n13	1	1																	1											1	
	o12	2	3	4							2												1								13	
	e11	3	14	31	85	1	3													1	2										140	
	e12	1	1	18	35	54	2	1			4										3							1			121	
f11	2	1	40	23	99	11	8			4										8							5			202		
f12	7	52	65	90	3	3				12										20							1			253		
g11	1	3	15	49	30	4				4									1	8		1					2			119		
g12	1	4	58	96	228	4	14			6									2	14		2					2			431		
g13	2	13	24																7											46		
h11	2	14	33	28	2	7				6									10						1					103		
h12	2	17	46	26	1	5													4	4		4	1				1			113		
h13	3	8	9	37						3									2	2					1					63		
h11	3	20	47	93	3	6				1									6			1								186		
h12	1	3	3	9	2															6		1					1			19		
h13	1	5	4	22	1					4										6							1			44		
j11	3	5	24																	2										34		
j12	2	8	5	37	1					4									1	19		3								80		
j13	4	8	45																3			1								24		
k11	2	5	8	3	1	1													2	6										40		
k12	1	5	9	15	1					1										6											30	
k13	1	7	2	15	3					1										2		1									27	
k8・k9・k10	1	1	10	11	1	2														1											14	
k13・k14	1	1	1	9						1													1								6	
b11~e11	4																														125	
b11~m11	1	15	27	51	1	8				5									2	12		3								6		
k8・k9	2	8	3	3	1	3				5										2	1	3					1			32		
k10・k11	1	4	4	12	1					3										11		1									38	
k12・k13	4	3	3	1						1										3											15	
k14	1	7	28	29	3														5					1						74		
べルト	3	11	6																	3										21		
べルト一括	4	7	1																	3										15		
一括	1																													2		
清掃中	2	24	35	56	8	3				2										6		1			1		3			142		
排土	6	37	115	173	335	23	17			98										20	1	6	2	3			41	1		881		
表土	4	22	59	43	168	8	8	1		30										5	73	4					9	1		441		
不明				2																2										4		
合計	50	8	305	1694	2496	5840	217	276	4	2	7	1	502	2	3	1	2	4	1	2	72	808	4	84	12	10	4	2	188	20	0	12621

層位名	高台杯		杯	杯類	杯血類	皿	高台皿	蓋	長頸蓋	蓋(11)	高台底	系切底	水甕	短頸蓋	小蓋	その他	平瓶	瓶類	甕	甕or瓶	焼台	鉢	鉢鉢	碗	不明	平瓦	丸瓦	道具瓦	合計
	1	2	3	4	6	8	5	7	18	18	9	10	高台底	系切底	11	18	18	18	15	16	17	18	18	18	18	18	18	18	18
上層合計	31	4	194	1151	1650	4204	137	178	3	1	3	0	298	2	0	2	1	34	569	4	51	8	5	2	1	120	18	0	8676
下層合計	7	3	36	298	491	964	36	52	0	0	2	0	59	0	0	0	0	7	123	0	14	1	2	0	0	13	0	0	2108

第5章 古代以降の調査

杯類全体の分布をみると、上層の全出土遺物の分布の特徴と同じく、灰原1には2箇所集中域が存在し、灰原2は散漫な分布をみせ、灰原3では中央にある程度出土量がまとまった範囲が存在している。なお、突帯付高台杯、高台杯、杯の分布を個別にみた場合、特定器種が偏在するというような特徴は見られないものの、灰原毎で器種別の組成率が違っており、灰原2・3上層では高台杯の組成率が灰原1より高く、逆に灰原1上層では杯の組成率が灰原2・3上層より高くなっている。

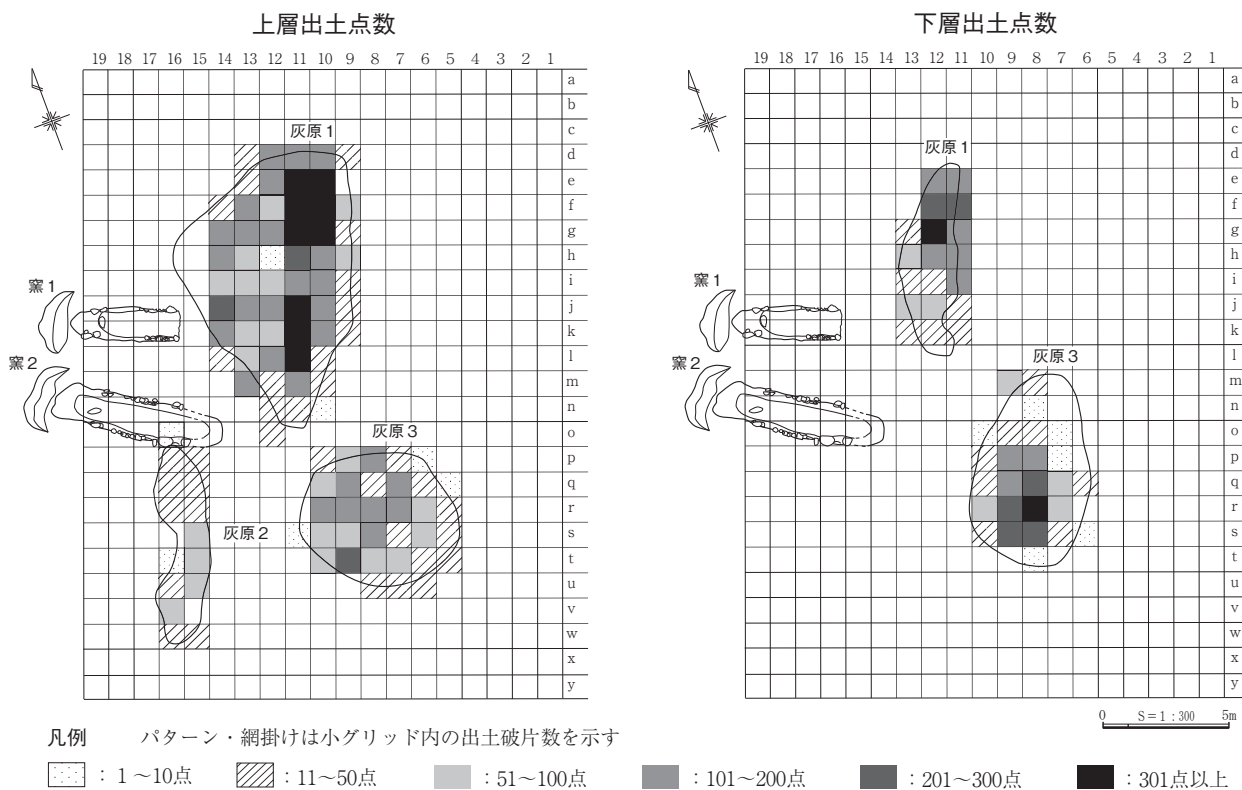
下層出土の杯類も全体的な分布傾向は全出土遺物の分布と同じで、灰原1・3とも1箇所ずつの集中域が見られる。なお、上層同様、灰原1と灰原3では高台杯と杯の組成率が異なっており、灰原3では高台杯の組成率がかなり高くなっている。

須恵器中型器種の分布状況(第130図)

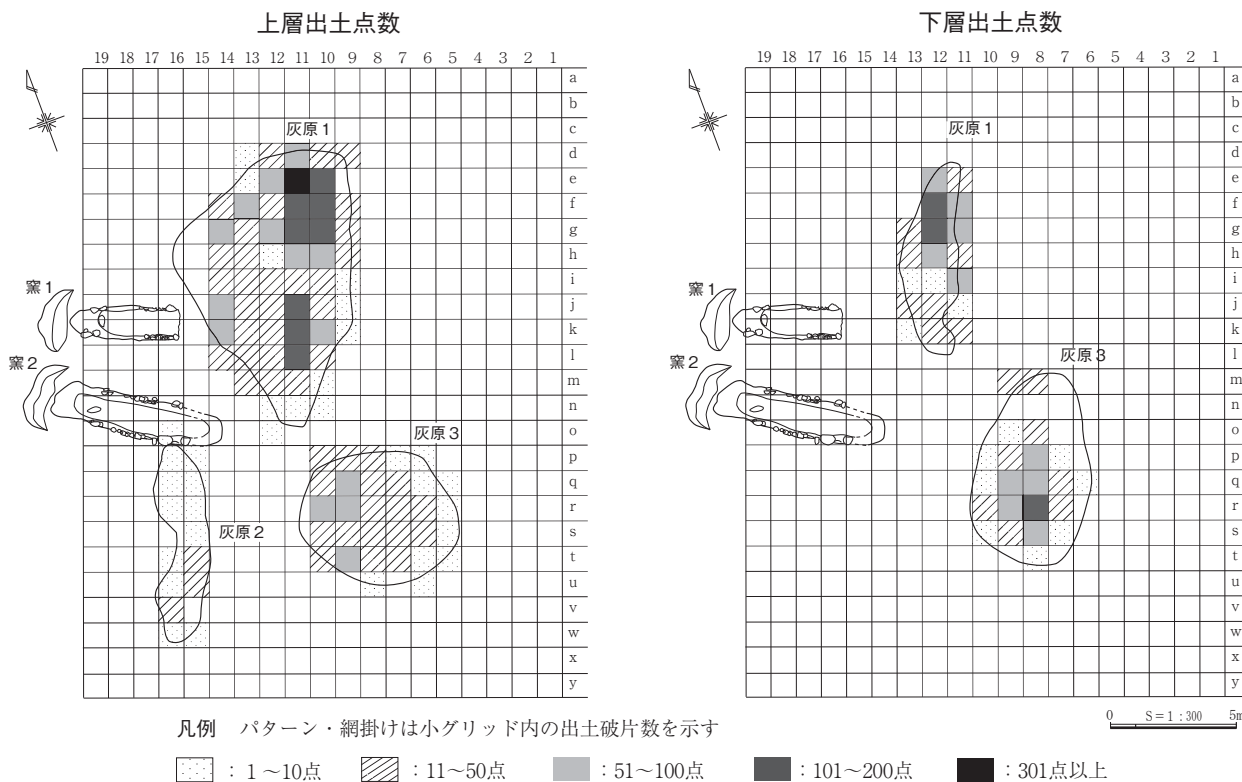
壺・瓶・鉢等の中型器種の分布傾向をつかむため、そのなかでも出土量のまとまっている壺類(分類番号⑨~⑪。小壺を除く)の分布を示した。壺類の分布傾向は、上層、下層とも、集中域の中心は若干ずれるものの、全遺物の分布とほぼ同じパターンを見出せる。ただし、とくに下層で顕著のように、灰原3の方が灰原1よりも壺類の出土数が多く、灰原単位でみた場合は壺類の分布に差があるといえる。壺以外の器種は分布を検討するのに十分な出土量がないものの、少なくとも特定の場所や特定の灰原に集中するなどの目立った分布にはなっていない。

表44 灰原2出土須恵器・瓦の器種組成

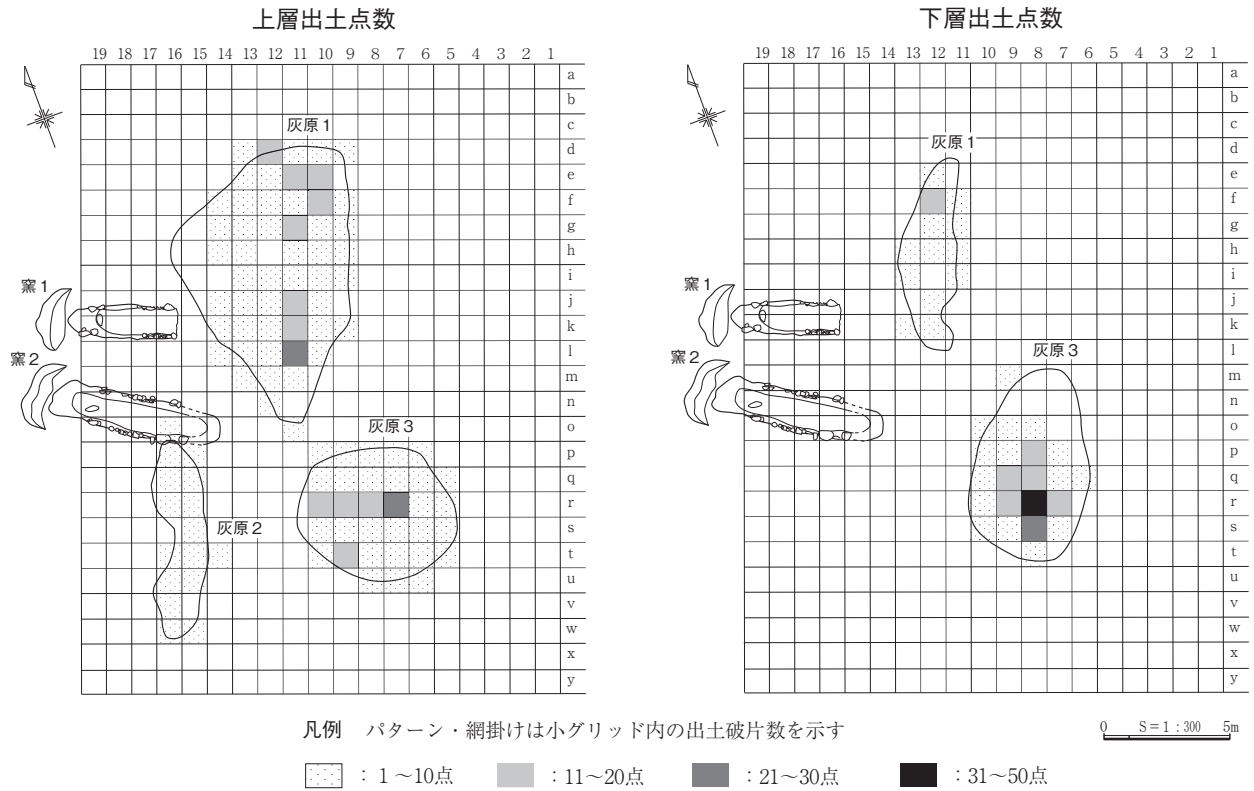
層位名	グリッド	器種 (下段数字は分類番号)																		合計			
		高台杯		杯	杯類	杯皿類		皿		高台皿	蓋	長頸壺	壺	その他壺類	瓶類	甕	焼台	鉢	鉄鉢		硯	平瓦	
		1	3	4	6	8	5	7	18	18	9	10	11	18	14	15	17	18	18		18		
上層	o16			1	1	3						3										8	
	p15		1	1	1	10						3			2	2						20	
	p16			1	1	8		2				4										16	
	p16~r16	1	1	4	4	9	2					6			3							30	
	q15			3	1	2		1				1										8	
	q16		1	3	1	7			1			2			1	3						19	
	r15			2	1	5					1	1				1					1	12	
	r16		1	3	6	7	2					2				1						22	
	s15		5	4		20		4				6				11		1				51	
	t14													1								1	
	t15		4	3	8	33				1	1	3			1	5	2		1		1	63	
	t16		2	1	2	2						1					1		1			10	
	u15		5	12	17	28	1	1				5										1	70
	u16				5	5	4		1			3										1	19
	v16		1	9	26	9	2					7				3	1					58	
w15		1	1	3	4	1	1				2				1	2					16		
w16		1		1	2	13					1	1									19		
表土		2	18	63	97	232	11	14			1	1	52	1	10	67	5		1	1	11	587	
攪乱		1	3	3		46	2				3	1			2	9					3	73	
検出中			1	10	14	34	2	2	1			6			1		1				2	74	
道埋土	s15		1			4																5	
合計		5	45	130	190	480	23	26	2	1	3	5	109	2	14	107	13	2	3	1	20	1181	



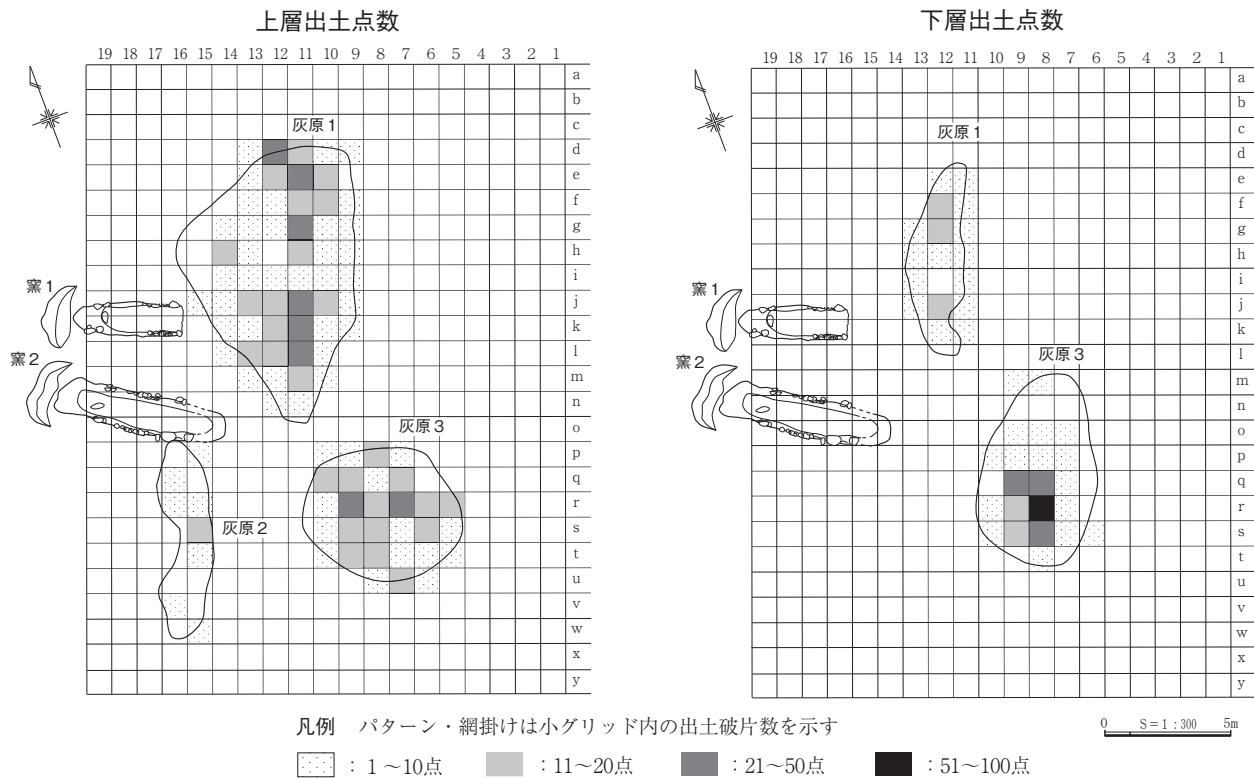
第128図 灰原出土遺物の分布(全器種)



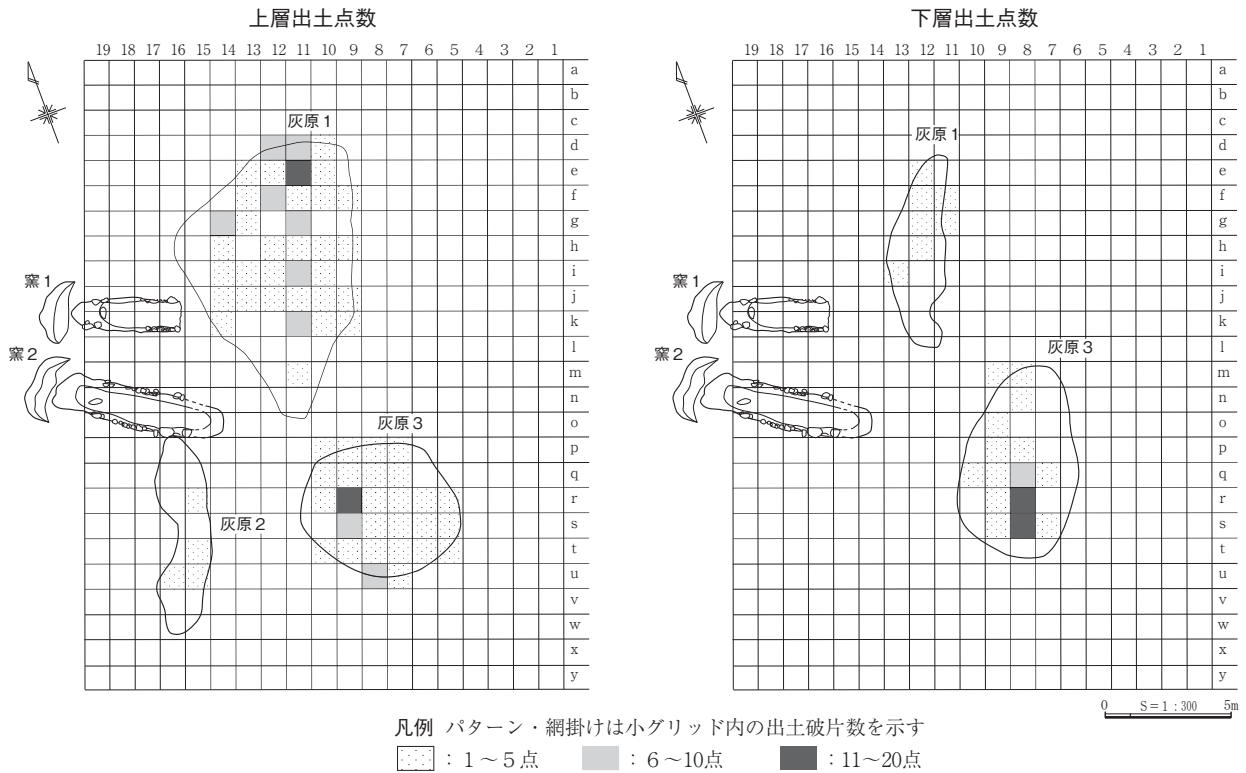
第129図 灰原出土杯類の分布



第130図 灰原出土壺類の分布



第131図 灰原出土甕の分布



第132図 灰原出土瓦の分布

甕の分布状況(第131図)

甕も壺類と同様の分布の特徴をもっている。灰原3下層の出土数が灰原1下層の出土数よりもかなり多く、灰原単位で比較した場合には分布に差がみられる。ただし、集中域の広がり方などの分布傾向は全遺物のそれとほぼ同じパターンである。

瓦の分布状況(第132図)

瓦も基本的には全遺物と同じような分布傾向にあるといえる。灰原単位で出土量を比較した場合、灰原3下層出土数が灰原1下層出土数より多い。

そもそも瓦は灰原での出土量が少ないことに特徴がある。瓦は2区テラス部で非常に多く出土しており、焼成後、瓦の多くは一旦2区テラス部へ搬出されていた可能性が高いと考える。つまり、2区テラス部が製品選別の場であった可能性もあり、灰原に廃棄された瓦は少数であったという推測もできる。また、瓦は窯壁材や焼台としても多く用いられているので、それらが廃棄されたものも灰原出土瓦に多く含まれているだろう。したがって、灰原3で瓦の出土量が多いのは、位置的に近い窯2で瓦を焼成していたことを示す可能性だけでなく、窯2が窯壁材や焼台として瓦を多く使用したことを反映している可能性もある。

遺構間接合の状況(表47)

灰原出土の甕や瓶類のなかには、別々の灰原出土の破片同士や、灰原出土の破片と窯出土の破片同士が接合した例が多くみられる。実測に耐えうるだけの大きさに接合した甕のほとんどは、こうした複数遺構での遺構間接合例である。灰原3を中心とした接合関係が最も多く、先述のように、甕や瓶類の分布の中心が灰原3にあることを反映している。灰原3との接合関係が最も多い遺構は灰原1で、下層出土の破片同士も接合している。したがって、灰原1と灰原3は先述のようにそれぞれが廃

棄単位として一応のまとまりがありながらも、「片付け」のような二次的な移動が行われている蓋然性が高く、一次的廃棄と二次的移動を繰り返しながら両者がほぼ並行して形成されたと考えられる。

また、甕516とその同一個体と考えられる接合資料をはじめとして、窯2と灰原3との接合例も多くみられる。こうした遺構間接合資料は、それを焼成した窯と廃棄した灰原の対応関係を知る手がかりとなる可能性がある。しかし、確認できた接合例の場合、接合破片数の主体は灰原出土にあり、複数の窯や同じ窯の複数段階からの出土破片が灰原出土破片と接合した例も多く存在する。また、516とその同一個体と考えられる接合資料の窯出土破片には、二次焼成を受けているものが多くみられる。さらに付言すると、516はかなり大型で、そのサイズからみて窯2で焼成した可能性はかなり低い。以上の点から、窯と灰原の接合資料の多くは、灰原に廃棄されていた破片が焼台や窯壁材として窯の中に持ち込まれたことを表していると考えられる。

このように遺構間での接合関係からは、大型器種の場合、窯出しに伴う廃棄以降の二次的移動が大きかったことが推測できる。

(4) 灰原出土遺物

器種組成(表42~46)

分布状況から灰原1、3はある程度廃棄の単位としてまとまりがありそうである。また、灰原間で器種組成に差がみられそうであることも分布図から読み取れた。ここで、改めて組成表から器種組成の特徴を確認しておく。

灰原間で明確な器種の偏在は見られない。構成される器種は基本的にすべての灰原で同じである。器種構成の主体となるのは、灰原1~3いずれも杯皿類である。なかでも、灰原1で最も組成率が高く、全体の約86%を杯皿類が占めている。一方、灰原2・3では75%前後の組成率である。また、杯皿類のなかでも、灰原間で高台杯と杯の組成比が異なっており、灰原1よりも灰原2・3の方が高台杯の組成率が高い。

中型器種と大型器種の組成率は、灰原2・3が灰原1より高くなる。灰原2・3では中・大型器種がそれぞれ全体の2割程度を占めるのに対し、灰原1は1割程度の組成率となっている。とくに、灰原3では甕の組成率が高く、甕のみで全体の約1割を占めている。

瓦は全体に占める組成率が低く、明確な傾向が示されないものの、灰原3にやや多く組成されている。

こうした灰原間での組成率の違いは、排出元の窯で焼成されていた器種構成の違いを反映している可能性がある。もちろん、窯と灰原は1対1では対応しないことは分布状況などから明らかである。また、接合関係で確認したように灰原内の遺物は二次的な移動が大きく、窯毎の廃棄単位は大きく乱れていると考えられる。しかしながら、絶対的な対応関係でなく、例えば、灰原1は窯1からの排出遺物が窯2のそれよりも多いというような、出土量の相対的な関係がある程度は残っている可能性は十分あるだろう。したがって、灰原3に中・大型器種が多く組成されているのは、それらを多く焼成した窯からの排出遺物が灰原1より相対的に多かったためと考えられる。この灰原3により多くの遺物を排出した窯は、窯2・3である可能性が高い。窯2・3は窯1よりも中・大型器種が多く出土しており、それらを焼成していたと考えられるほか、灰原と窯の位置関係もそれと整合する。一方の灰原1は、灰原3とは逆に、窯1から排出された遺物が相対的に多い可能性が考えられよう。

表47 須恵器の遺構間接合関係

掲載番号 接合番号	器種	窯1		窯2			窯3			灰原1			灰原2	灰原3			他	計	
		新	埋戻	古	新	埋戻	第2	第3	上層	下層	上層	他	上層	下層	上層	他			
515	横瓶		5	1	1	1						2			6	4	1	8	29
516	甕			4	1	2				1	2				19	13	2	10	54
517	甕					1					2	1			7	8		1	20
518	甕		1							1									2
519	甕									1	2	1			2	2	2		10
520	甕										6							4	10
521	甕										4							1	5
522	甕													1	3				4
524	甕														1			1	2
a	焼台											1	1						2
b	甕											1			4			1	6
c	甕											1			4				5
d	甕										1				2	2			5
e	甕					1									4			1	6
f	甕			4	4										4				12
g	甕									2		2			2	1			7
h	甕											1	1						2
i: 516の 同一個体	甕			2	2						1				1				6
j	壺類								1				1						2
k	瓶類														1			1	2
l	瓶類										1				4				5
m	瓶類						1								1				2
n: 515の 同一個体	瓶類			4											4				8
o: 515の 同一個体	瓶類											1			1				2
p	甕			1							1								2
q	甕	1													1				2
r	甕				1			1											2
s: 516の 同一個体	甕	2			1														3
t: 516の 同一個体?	甕				1									1					2
u: 516の 同一個体?	甕			1	8					1									10
v: 516の 同一個体	甕			3											3	4	1		11
w: 516の 同一個体?	甕			3	6	1									2				12
x: 516の 同一個体?	甕			4	3										2	1		1	11

※数字は出土破片数を示す

灰原1 出土遺物(第133~139図、PL89-2~95・112-2・113-1)

311~317は突帯付高台杯で、311・312が下層出土である。いずれも残りが良くないが、形態的なバラエティーに富んでいる。口縁の残る311~314は、体部から口縁にかけて直線的に外に開く形態となっている。317の底部付近の体部は313と大きく異なり、丸みを帯びた碗状の形態をとる。

318~328は高台杯で、318・319が下層出土である。全形の分かる318・320・321・327はほぼ同じ形態で、法量も近似している。全形の不明な資料は形態やサイズにバラエティーがみられる。323は横走する低い粘土帯のようなものが体部にみられる。これは突帯付高台杯の突帯が焼成前に剥落した(剥がされた)痕跡の可能性が有る。325・326は底径がかなり小さく、特異な形態である。

329~366は杯で、329~336が下層出土、337~361が上層出土、362~366が層位不明のものである。下層出土のものは、体部が口縁に向かってやや外反しながら広がる形態をとるものが多く、それらの法量は比較的近似している(329~333)。334・335は体部の下半が若干内湾する形態で、法量もやや小

第5章 古代以降の調査

さい。上層出土遺物は形態、サイズともバラエティーに富む。形態的な特徴から、体部が直線的または外反しながら外に開くもの(337~344)、体部の中央が若干内湾気味に膨らむもの(345~347)、体部が全体的に内湾気味のカーブを描くもの(348~353)など、大まかな分類はできるが、窯内出土資料に比べて個体毎の差がかなり大きい。357や366など他にはほとんど見られない特徴的な形態のものも出土している。

367~382は皿で、367のみが下層出土、他は上層出土である。皿も杯同様に、形態、サイズともにバラエティーに富む。383~386は高台皿で、383~385が上層出土、386が表土出土である。全形が分かる2点の高台皿は、無高台の皿と比べて口径が小さく、体部が厚めに作られている。

387~392は壺類である。いずれも部分的な破片である。387・388は長頸壺の頸部で、いずれも頸部の付け根に突帯が巡る。389は壺の胴部で、長頸壺のもの可能性が高い。窯1・2から出土した破片が接合した390は小壺の口縁から頸部で、器壁がかなり薄く作られている。391は水瓶の口縁から頸部で、頸部の空洞部分が非常に狭く作られており、頸部の下端部、胴部との接合部分には回転糸切り痕が残っている。392は、本遺跡で一般的な長頸壺からすると頸部が短いため、単に壺として分類した。他に同様の器形をとる個体は確認していない。

393は蓋である。394・395は短頸壺で、395はいわゆる葉壺形の器形をとっており、肩部に有孔の耳が付いている。396はタタキと当て具痕が見られるので瓶類として分類したが、器形からは短頸壺とした方が良さだろう。397は壺の胴部から底部で、底面に回転糸切り痕が残る。長頸壺(水瓶)の底部の可能性が考えられる。

398~400は鉄鉢形の鉢で、いずれも小片のため全形は不明である。401~407は鉢で、形態やサイズにバラエティーが見られる。408・409は風字硯の破片で、いずれも底面に脚が貼り付けられているほか、409には硯面に仕切りの突帯が貼り付けられている。410は甕片の転用焼台で、表面には小型の甕または壺の底部片が熔着している。411は高台杯の転用焼台である。

製鉄関連遺物は炉底塊1点、流出溝滓1点が出土している。

412~428は瓦である。412のみ下層出土である。414・422は灰原1出土破片と灰原3出土破片が接合している。412・413・415~422が平瓦で、421、424は凸面表面にスサや糲の圧痕が残る。414・423~425・427が丸瓦、426は熨斗瓦とみられ、やや変形しているが平瓦ではなく、丸瓦を3分の2程度に分割したものと考えられる。428が隅切瓦で、凸面は比較的丁寧なケズリ調整が施される。

灰原2出土遺物(第140・141図、PL92・97-1・112-2)

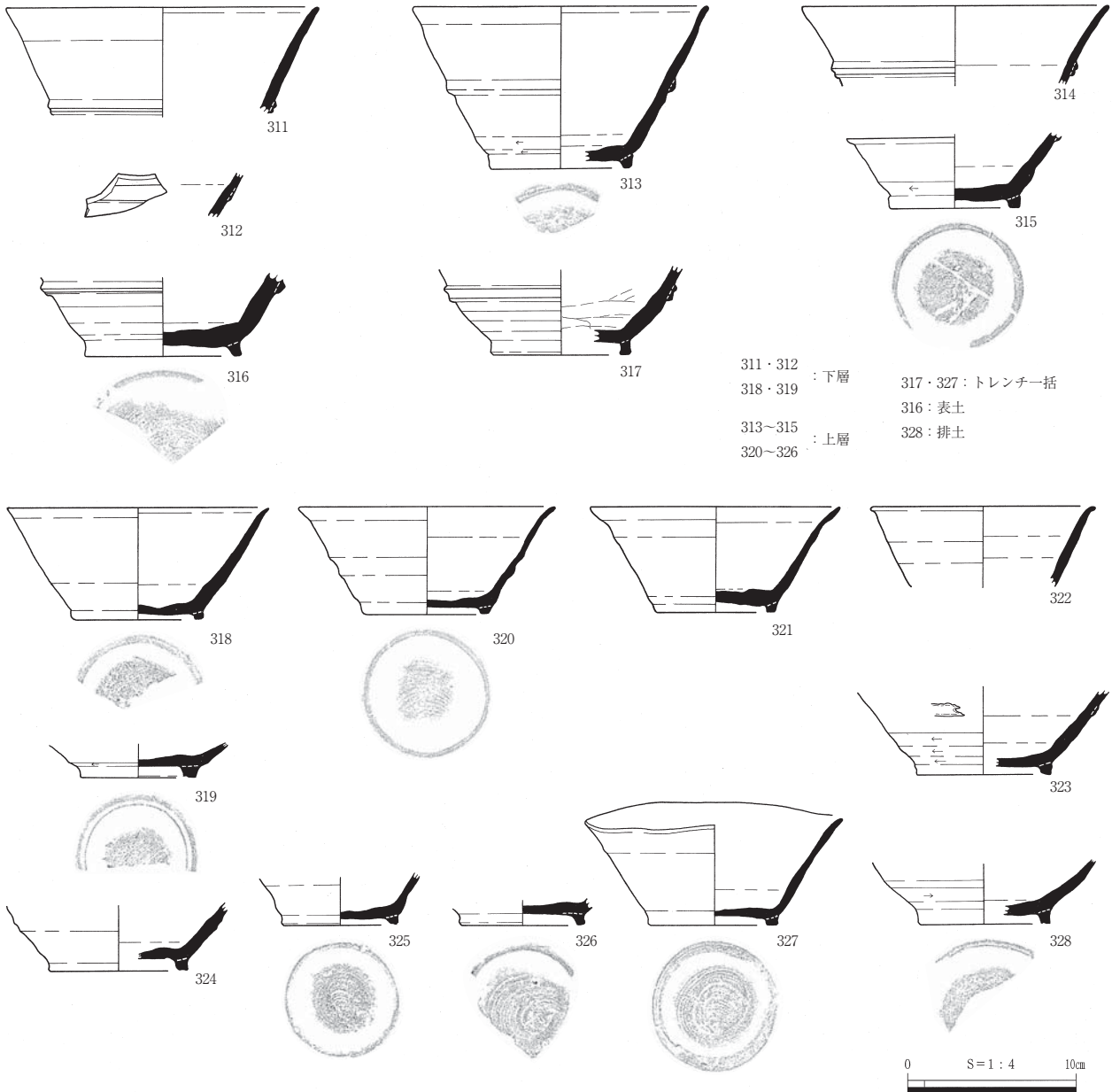
429~433は高台杯で、他の遺構ではほとんど見られない資料を図化している。429・430は高台の位置が底部の端より内側に入っており、体部の立ち上がり立ち気味である。こうした形態は、本遺跡の一般的なものより、型式学的には古相を示していると考えられる。432は体部が大きく開いており、高台が非常に低い。433は高台が他のものに比べて非常に高い。

434・435は杯である。

436・437は皿である。438・439はいずれも高台皿と判断したが、438は高台杯の可能性もある。440・441は長頸壺の口縁部から頸部にかけてで、いずれも頸部付け根に突帯が付かないタイプである。442は蓋で、おそらく短頸壺とセットになるものであろう。443は鉄鉢形、444は杯の転用焼台である。

445~448は瓦である。445~447は平瓦、448は薄手の隅切瓦である。

その他、図は掲載していないが、製鉄関連遺物が5点出土している。

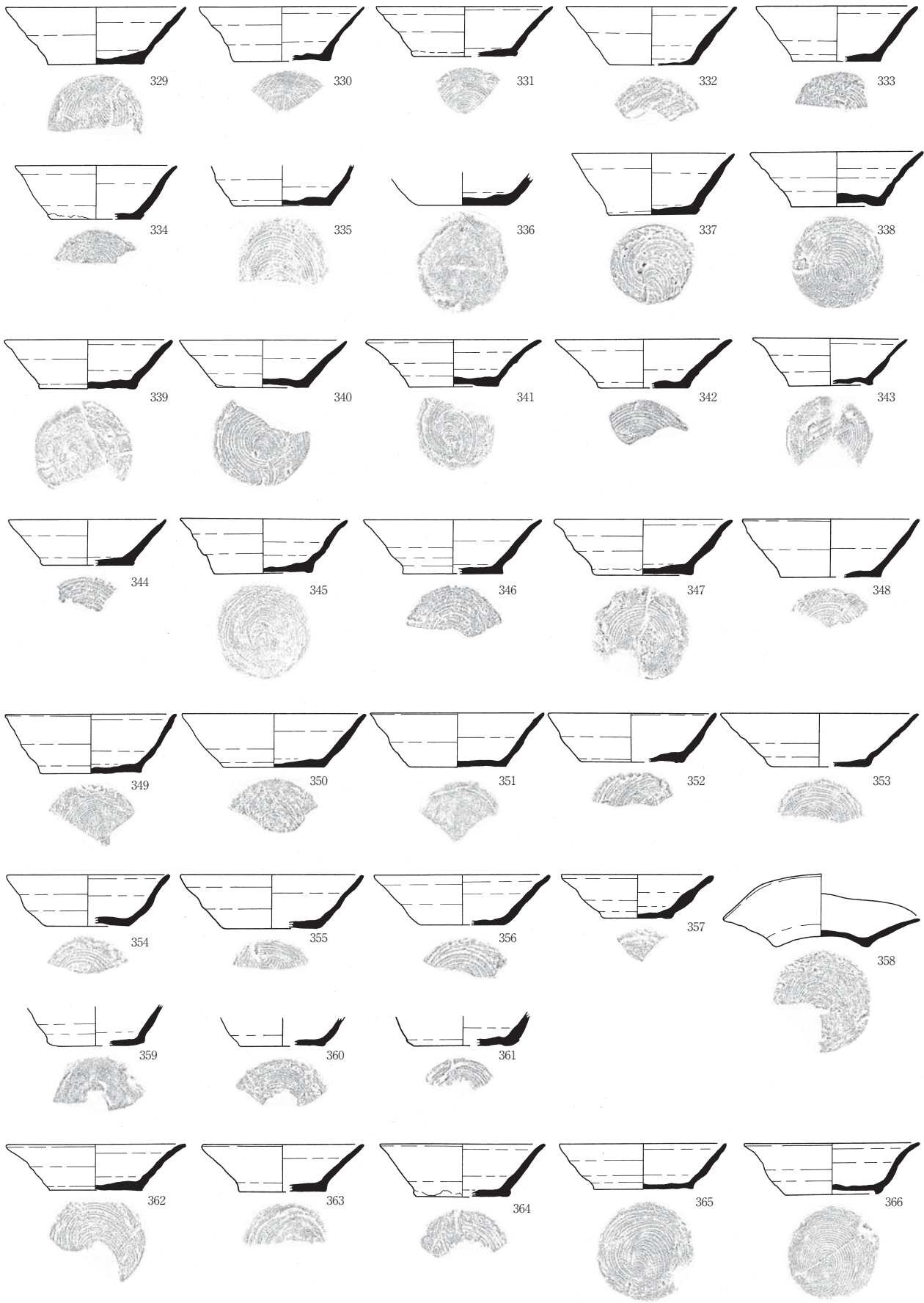


第133図 灰原1出土須恵器(1)

灰原3出土遺物(第142～146図、PL96・97-2・98・99・112-2・113-1)

449～453は突帯付高台杯で、449・450が下層、451が上層、452・453が表土から出土した。灰原1出土の突帯付高台杯と同様、形態やサイズにバラエティーがありそうである。454～459は高台杯で、454・455が下層出土、456～458が上層出土、459が表土出土である。高台杯も形態にバラエティーが存在している。454は焼き歪みが大きい個体である。456は底部付近の体部が丸く作られており、碗に近い形態となっている。457・459は高台から体部にかけての外形が直線的に立ち上がっており、窯3第3段階出土高台杯に多くみられる形態に類似している。460～469は杯で、460～463が下層出土、464～467・469が上層出土、468が攪乱土出土である。体部がやや外反しながら開くタイプのものが多く、形態的には比較的揃っている。これらと異なった形態のものには、体部下半がやや内湾して立ち上がる463や、体部が急な角度で直線的に立ち上がる467などがある。

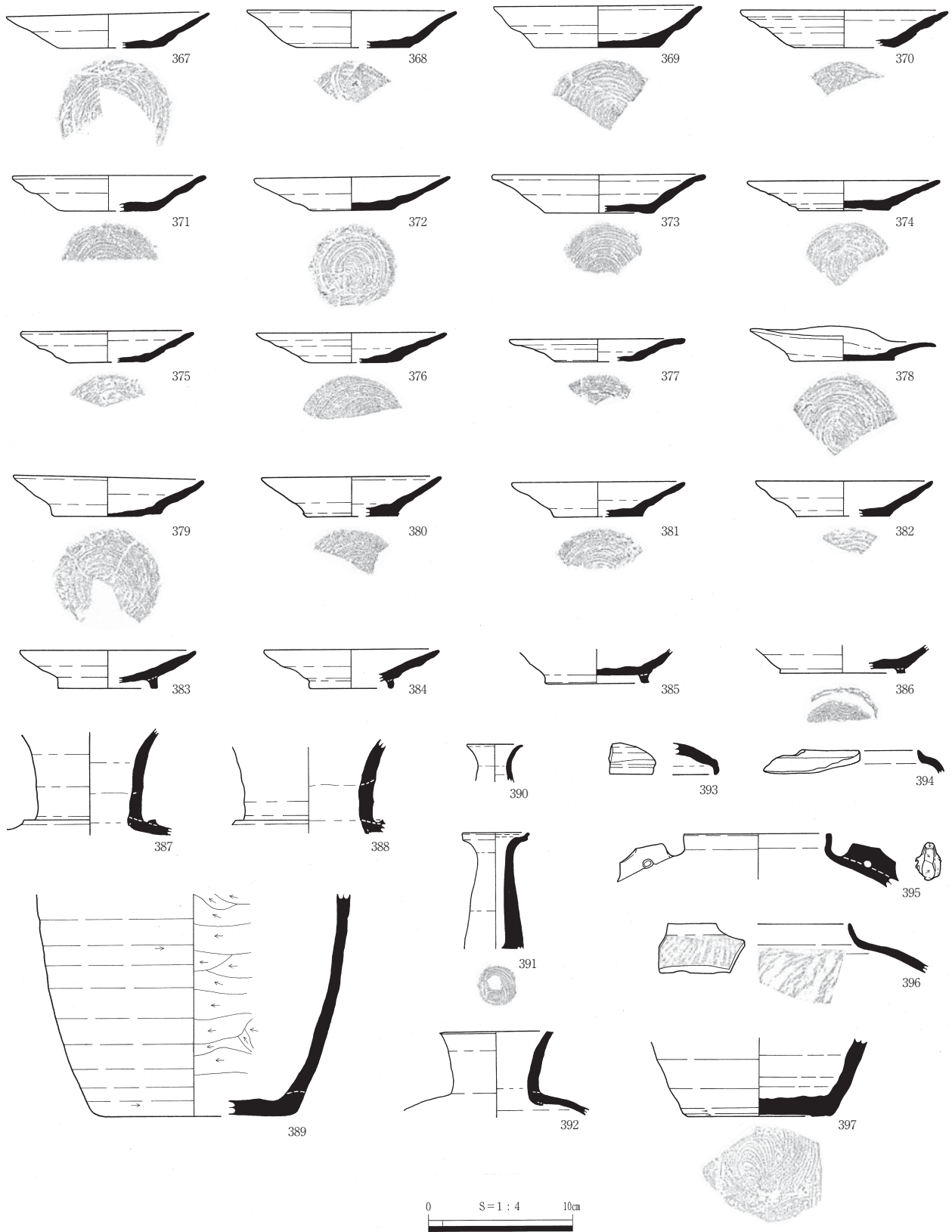
470～474は皿で、470・471・474が下層出土、472・473が上層出土である。ほとんどは体部がやや



329～336：下層 337～361：上層 362：トレンチャー括 363～366：排土

0 S=1:4 10cm

第134図 灰原1出土須恵器(2)



367 : 下層	368~385	386・394 : 表土
	387~389 : 上層	390 : トレンチャー拵
	391~393	396 : 排土
	395・397	

第135図 灰原1出土須恵器(3)